

2018年8月1日

みずほディーラーズアイ (2018年8月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

＊見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 109.00 ~ 113.00

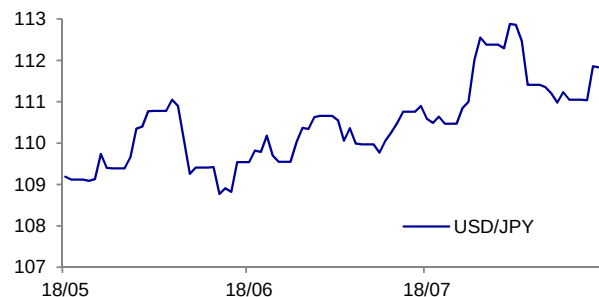
国際為替部 為替営業第二チーム 森谷 友一

■ 先月の為替相場

7月のドル/円相場は上昇する展開となった。週初2日に110円台後半でオープンした後、111円を上抜ける場面も見られたが、同水準では売り意欲も強く110円台後半まで反落。3～4日は米中貿易摩擦懸念を背景に月安値となる110.27円をつけた。5日、日系企業による米企業の欧州事業買収の報道等を背景にユーロ/円が急伸しドル/円は110円台後半まで連れ高に。6日は米国による対中関税が発動したものの、市場の反応は限定的。米6月雇用統計は失業率や平均時給が弱めな内容だったこともあり110円台前半まで下落した。9日は英国政治の先行き不透明感の高まりからポンド売りドル買い地合いとなり、全体的なドル買いの流れの中で110円台後半まで上昇。10日はトランプ米大統領が中国への追加関税を準備していると伝わると110円台後半まで下落。11日はストップを巻き込みながら112円を上抜け。12日から13日にかけてもこの流れが続き112円台後半まで上昇した。16日は東京休場となる中、中国・EU・カナダなどの報復関税は不当と米政府が世界貿易機関(WTO)に提訴したとの報を受け112円台前半まで下落。17日はパウエルFRB議長が米経済について楽観的な見解を示したことが好感され113円手前まで続伸。18日もドル買いの流れは継続し113円を上抜けたが、米鉄鋼・アルミ関税はWTOルール違反と中国が表明したことが嫌気され112円台後半まで反落。19日は良好な米経済指標を受けて月高値となる113.18円をつけたが、トランプ米大統領がFRBの利上げに対して不満を示すとドルが売られる展開となり112円台前半まで急落。20日は週末前のポジション調整などを背景に111円台前半まで下落。23日は日銀が金融政策の修正を検討しているとの報道を受け110円台後半まで値を下げたが、ドル買戻しが強まると111円台半ばまで反発。24日は人民元のフィッシングレートが約1年ぶりの元安水準に設定されると、111円台前半まで売られるも、中国国務院による積極財政政策への期待感から上海株が上昇すると111円台半ばまで反発。25日は日銀によるETF購入配分見直しとの報道を受けて円買いが強まると110円台後半まで下落。26日は円長期債利回りが再び上昇する流れとなる中、指値オペが見送られると、一時月安値となる110.58円まで下押された。27日、米4～6月GDPの発表後に110円台後半まで売られたものの、米株安が一服すると111円台前半まで反発。30日は重要イベントを控えて111円ちょうどを挟んでのみ合い推移に。31日は日銀が「強力な金融緩和と継続のための枠組み強化」を決定したが、長期金利目標は据え置かれたこと等から円安が進行。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 今月の見通し

今月のドル/円相場は上値の重い推移を予想する。

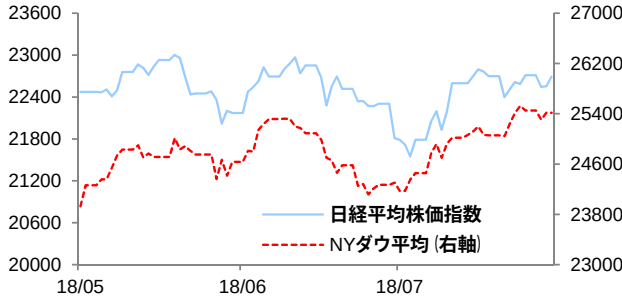
先月後半以降、日銀の金融政策に対する注目度が高まっている。7月30～31日に開催された日銀金融政策決定会合においては「強力な金融緩和と継続のための枠組み強化」を決定。政策金利についてのフォワードガイダンスの導入とともに、金利については「経済・物価情勢等に応じて上下にある程度変更しうろ」とした。事前に政策調整に対する期待感が高まっていた中、長期金利の目標について「ゼロ%」程度で据え置かれたこと等から直後は円安で反応したものの、これまで事実上0.1%を上限としていた長期金利の誘導目標について柔軟性を与えることで、金利の上昇を以前よりも許容する格好となったことを勘案すると、円安の反応はさほど長続きするものではないと考えている。

一方、米国においては8月1日にFOMCが開催される。前回6月会合において25bpの利上げが決定され、FOMCメンバーによる政策金利見通し(ドットチャート)における年内利上げ回数の中央値が3回から4回に引き上げられたばかり。FRBによる利上げが継続的に実施される中、中立金利に関する議論に注目が集まるものの、6月FOMC以降に発表された経済指標やFOMC関係者の発言において、今後の利上げペースの見立てに大きな変更を強いるほどの新規材料は特段無かった事を勘案すると今会合においてはサプライズは無い可能性が高そう。年内残り2回の利上げについては織り込みが進んでいることも踏まえると米金融政策への期待を受けてのドル買いは盛り上がりづらい状況と言えそうだ。

また、貿易摩擦関連の報道やトランプ政権の言動には引き続き注意が必要だ。7月6日に米国による対中関税第一弾が発動したものの大きな混乱につながっていないことや米欧首脳会談において合意に到ったことは安心材料ではあるものの、依然として米中間での決着は見えておらず、今後の動向次第では再びリスクオフを誘発する可能性もあり得る。また、先月はトランプ大統領が為替や金利の水準に言及。ドル高局面においては再度トランプ大統領からドル高を牽制するとの思惑が高まることも想定され、ドルの上値を重くする要因となりそうだ。

■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/2	ISM製造業景況指数	6月	58.5	60.2	58.7
7/5	ISM非製造業景況指数	6月	58.3	59.1	58.6
7/6	非農業部門雇用者数変化	6月	195 K	213 K	244 K
7/6	失業率	6月	3.8%	4.0%	3.8%
7/6	平均時給(前年比)	6月	2.8%	2.7%	2.7%
7/12	消費者物価指数(前年比)	6月	2.9%	2.9%	2.8%
7/16	小売売上高(前月比)	6月	0.5%	0.5%	1.3%
7/18	米住宅着工件数	6月	1320K	1173K	1337K
7/27	GDP(年率/前期比)	2Q	4.2%	4.1%	2.2%

カスタマーディーラーの相場観、注目点 (本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル・ブル (3名、108.50～115.00、中心110.00～115.00)

藤巻	110.00 ～ 114.50	指標については総じて悪くなく、米企業決算も良好であった。政治についても落ち着いており、中間選挙に向け更なる減税が発表される可能性がある。ポジショニングとしては、下を警戒している向きが多い印象を受けるので、上昇サイドがペインか。
岡本	108.00 ～ 115.00	俄かに盛り上がった日銀YCCの柔軟化だが、結果は金融政策に大きな変化なしとの認識。8月はイベントが少なく大きな動きが出るとは思えず、世界的な貿易紛争を前にしたドル買い優勢の地合いが続くと予想。ドル円も底堅い値動きとなろう。
上野	110.00 ～ 115.00	トランプ大統領のFRBによる利上げ批判を受けても、市場の利上げの織込みには大きな変化なし。貿易摩擦への懸念は熾ぶるが、足元の米経済は堅調そのもので米株も確りとした推移。流動性が細る8月ではあるがドル円は底堅い推移になるのでは。

■ドル・ベア (7名、107.00～113.00、中心108.00～113.00)

田内	108.00 ～ 113.00	トランプ米大統領によるFRB利上げ批判とドル高牽制発言に上値を抑えられ、根深い通商摩擦懸念と新たに警戒され始めた通貨安競争の問題に加え、日米通商協議への警戒感が材料視され、引き続き伸び悩む展開を予想する。
加藤	108.00 ～ 112.00	日銀の決定については、FFR交渉開始を前に政府・財務省・日銀の思惑が一致したタイミングであったように思える。欧州のように緩和＝為替操作と勘ぐられたくなかったのではないか。いずれにしろ金融政策の舵に手をかけたわけで下値を試しそうである。
山下	107.00 ～ 112.00	経済指標の上では米経済の堅調さが覗えるものの、米企業決算はまちまちの結果でハイテク銘柄を中心とした米株の軟調推移は気になる。金融緩和をあくまで続ける日本がトランプ大統領のターゲットになる可能性も高く、ドル円の上値は重いと考える。
光石	108.00 ～ 113.00	7月日銀金融政策決定会合では当面の間極めて低い金利水準を維持することが決定し円高圧力は後退したものの、トランプ米大統領による利上げおよびドル高けん制発言もあり、ドル円はレンジ相場の継続を予想。8月末に向けて米中間の貿易摩擦が悪化する際の円高の動きには注意したい。
森谷	109.00 ～ 113.00	日銀は長期金利目標こそ据え置いたものの、今後はより柔軟な金融政策を行うことを示唆。円金利上昇の余地が広がる一方で、米国の利上げペースは既に織り込みが進んでいることを勘案すると、ドル円は伸び悩む展開を予想する。
鶴田	109.00 ～ 113.00	足許で強まった日銀の金利誘導目標柔軟化観測は後退したように感じられ、円買い圧力も弱まった様子はあるも、ドル円相場の上昇材料とは考え難い。夏枯れ相場となる中で月末には米中貿易摩擦懸念が再燃する可能性もある状況下、一定のレンジ内での上値の重い展開を予想する。
大熊	108.00 ～ 113.00	米国は日本との間で慢性的な貿易赤字を抱えていることに不満を示していること等から、日米貿易協議を控えて、米国が一層の市場開放を求めてくる警戒感が高まっている。加えてトランプ大統領のドル高けん制・為替操作発言に対する警戒感が根強い中ではドル買い基調にはなりにくいと考える。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.1550 ~ 1.1950
EUR/JPY 128.00 ~ 133.50

国際為替部 為替営業第二チーム 田家 裕介

■ 先月の為替相場

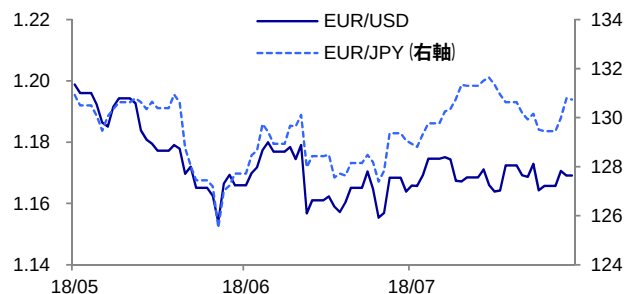
先月のユーロ/ドルは1.15台後半から1.17台後半でのレンジ推移となった。月初2日、1.16台後半で取引を開始したユーロ/ドルは独主要政党間で移民・難民政策を巡って対立したが、その後は合意したとの報道や日系企業による米企業の欧州事業買収、伊財務相がユーロの離脱を正式に否定したこと等が好感されたことで5日にかけて1.17台まで上昇。6日、米6月雇用統計の結果を受けてドル売りの流れとなったことや9日にはノボニー・オーストリア中銀総裁がマイナス金利を永久に続けることはないと言ったことで月最高値1.1790をつけた。10日、独7月ZEW景況指数が予想を下回ったことや11日にはドル買いの展開にユーロ/ドルは13日にかけて一時1.1613まで下落するも、17日に日欧の経済連携協定が報道されたことから1.1745まで反発。しかしパウエルFRB議長が当面は利上げを継続する方針を示したことや19日には米経済指標が良好な結果となったことで月最高値1.1575まで反落。その後トランプ米大統領がFRBの利上げに不満を示したことからドル売りの流れに反転し、23日にかけて1.1750まで反発した。24日、1.16台半ばまで下落するも25日にはトランプ米大統領とユンケルEU委員長が会談を実施し、貿易戦争が回避される見通しになったことから1.17台を回復。26日、ECB政策理事会では市場の予想通り金融政策の現状維持が決定。ドラギECB総裁がユーロ圏経済に強気の発言をしたことからユーロ/ドルは一時的に上昇するも、フォワードガイダンスの変更は必要ないとの発言で1.16台半ばまで下落した。27日、1.1620まで続落するも、30日には1.17台を回復し、31日も同水準での推移となった。一方、先月のユーロ/円は小幅に上昇する展開となった。月初2日に129円台前半で取引を開始したユーロ/円は月最高値128.43円をつける場面も見られたが、ユーロ/ドルが上昇する中、ユーロ/円は連れ高の展開とな9日にかけて130円台前半まで上昇。その後は寧ろドル/円が113円台まで上昇したことでユーロ/円は10営業日連続で上昇し、17日には月最高値131.98円まで続伸。しかしドル/円が下落する中、ユーロ/円も24日にかけて129.75円まで下落。26日、ECB政策理事会では上述の通りユーロ売りの流れとなったことで27日にかけてユーロ/円は129.14円まで続落するも30日には130円丁度付近まで反発。31日、日銀金融政策決定会合で政策金利のフォワードガイダンスが導入され、当分の間極めて低い長短金利の水準を維持することが示されたことでユーロ/円は130円台半ばまで上昇した。

■ 今月の見通し

今月のユーロ相場は底堅い推移になると予想する。まず米国とEUの貿易政策に関しては、先月の25日にトランプ米大統領とユンケルEU委員長が会談を実施。EUは米国産大豆と液化天然ガスの輸入を増加させる一方、米EU間で自動車以外の工業品に関する関税撤廃や鉄鋼・アルミニウムの輸入制限と報復関税解決への協議を開始することで合意した。6月初旬に米国がEUに鉄鋼・アルミニウムの関税を発動して以降、米EU間の貿易戦争への懸念が高まっていたものの、当会談によってそのリスクが後退した印象だ。市場にとってこの合意をポジティブサプライズであり、関税ゼロや非関税障壁の撤廃に向けた建設的な議論への期待感ユーロのサポート材料となろう。一方、難民問題に関して5月のEU首脳会談で一応の合意形成はなされたもののイタリア等の難民登録国に難民を送還するには登録国の同意が必要であるが、ポピュリズム政党の発言力が増している中では難民の受け入れが認められる可能性は低いだろう。また、いずれの国にも難民登録をしていない難民は送還先が無いという問題もある。現状、欧州の難民問題が解決する目処は立っておらず、秋の欧州議会で議論される予定だ。もっとも、難民問題は引き続きユーロ圏の問題として意識されるものの今月は欧州各国が休暇に入ることからこの問題が再燃する可能性やポピュリズム政党の台頭など欧州の政治リスクが高まる可能性も低いだろう。金融政策に目を向けると先月の26日にECB政策理事会が開催され、市場の予想通り金融政策の現状維持が決定された。その後のドラギECB総裁の会見でフォワードガイダンス変更の必要は無いとの見解が示されたことでユーロは下落したものの、これまでと同様の内容であり、相場への影響は一時的なものに止まると考える。またドラギECB総裁は今年のユーロ圏経済指標は去年と比較してやや弱いものの、「最新の経済指標や調査結果は安定している」と強気の姿勢を示しており、底堅いと予想される欧州経済はユーロの上昇圧力となろう。米EU間の貿易戦争への懸念が後退していることや欧州各国が休暇シーズンに入ることから政局不安が高まる可能性は低いことに加え、ドラギECB総裁からユーロ圏経済は強固で幅広い成長をしているとの見解が示されたことで今月のユーロ相場は底堅い展開を予想する。

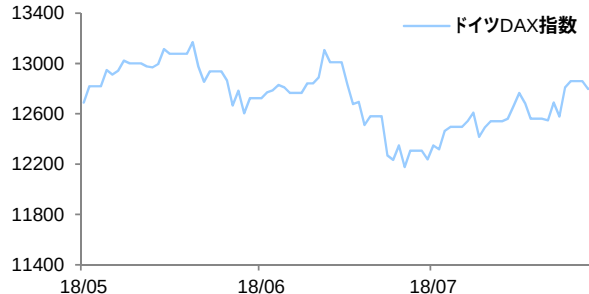
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/2	ユーロ圏マークイット製造業PMI	6月	55.0	54.9	54.9
7/3	ユーロ圏小売売上高(前月比/前年比)	5月	0.1%/1.6%	0.0%/1.4%	-0.1%/1.6%
7/5	独製造業受注(前月比)	5月	1.1%	2.6%	-1.6%
7/10	独ZEW指数(現状/期待)	7月	78.1/-18.9	72.4/-24.7	80.6/-16.1
7/18	ユーロ圏CPI(前年比/前月比)	6月	2.0%/0.1%	2.0%/0.1%	2.0%/0.5%
7/24	ユーロ圏マークイット製造業PMI	7月	54.7	55.1	54.9
7/25	独IFO企業景況感指数	7月	101.5	101.7	101.8
7/26	ECB主要政策金利	7月	0.00%	0.00%	0.00%
7/26	ECB Marginal Lending Facility	7月	0.25%	0.25%	0.25%
7/26	ECB主要政策金利	7月	-0.40%	-0.40%	-0.40%

カスタマーディーラーの相場観、注目点 (本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ・ブル (3名、1.1500～1.2100、中心1.1500～1.1900)

藤巻	1.1600 ～ 1.1900	欧州については、市場予想を上回る指標が確認され始めているほか、政治情勢も落ち着いている。原油が堅調に推移するなどインフレ見通しも悪くない。さらに投機筋も再度ロングを積み増しつつある。よって、基本的には底堅く推移するのではないだろうか。
岡本	1.1500 ～ 1.2100	伊政局は落ち着きを取り戻した一方、欧米間での貿易紛争懸念が相場の重石に。欧米首脳会談では自動車や一部農産品を含まない合意に留まり、すでに両首脳で意見の相違が見られるなど一段と買い進める材料も少ないため、足元のレンジ内で推移するか。
上野	1.1500 ～ 1.1900	懸案だった対米の貿易摩擦については、先般の米EU首脳会談にて貿易対話の開始が決定。交渉期間中は新たな関税の導入見送りが米側より示唆され、EU側は時効の中断を計れた格好。政局不安も一服、経済指標も比較的落ち着いており、ユーロは緩慢ながらも底堅い推移になるのでは。

■ ユーロ・ベア (7名、1.1300～1.1900、中心1.1400～1.1800)

田内	1.1300 ～ 1.1800	トランプ米大統領とユンケル欧州委員長の会談で一旦は米欧貿易摩擦は緩和したかに見えたが、自動車関税に関して決着しなかった点を鑑みるに米欧貿易摩擦の激化懸念は依然として熾り続けており、米欧金融政策の乖離も相俟って上値の重い展開を予想する。
加藤	1.1300 ～ 1.1800	正常化への道のりが遠いことはドラギECB総裁も認めているところ。ユーロ圏内での政局も決して落ち着いたとは言えず、徐々に上値が重くなっていくと予想する。
山下	1.1400 ～ 1.1800	ユーロ圏経済全体の成長減速はドラギECB総裁も認めているところであり、ECBが直近でタカ派に傾斜することは考えづらい。一時的に落ち着きを取り戻しているドイツ・イタリア政局も不安が払拭されたとは言い難く、ユーロの上値は重いと予想する。
光石	1.1300 ～ 1.1900	米欧間の金融政策のスタンスの違いがユーロドルの上値を抑えるものと予想。引き続き独、伊、西等ユーロ圏諸国の政局不安が完全に払拭されていないこともユーロのネガティブ材料となろう。
森谷	1.1400 ～ 1.1800	7月ECB理事会は前回は概ね踏襲する内容となっており、2019年夏とされている利上げ時期観測を前倒しにするものとはならず。金融政策に対するスタンス変更は当面見られないと思われることや、依然として欧州政治リスクが意識される中、ユーロは上値重く推移すると予想する。
鶴田	1.1500 ～ 1.1850	通商政策を巡っては、米国による追加関税措置が回避されるなど貿易摩擦懸念が後退する展開となるもユーロ相場は足許のレンジをブレイクするには至らず。夏枯れ相場が予想される中で出口政策の早期化にも期待を持たない状況下、引き続き一定のレンジ内での上値の重い展開を予想する。
大熊	1.1400 ～ 1.1900	先月の米欧首脳による通商協議では、貿易摩擦の緩和で合意したものの、貿易問題を巡る不透明さは残存している。また、ECBは少なくとも2019年夏までは政策金利を変更しないとしており、利上げを進める米国との金融政策の方向性の違いが明確化している中では、軟調な推移を予想する。

英ポンド相場

予想レンジ:

GBP/USD 1.2700 ~ 1.3300
GBP/JPY 144.00 ~ 150.00

欧州資金部 神田 史彦

■ 先月の為替相場

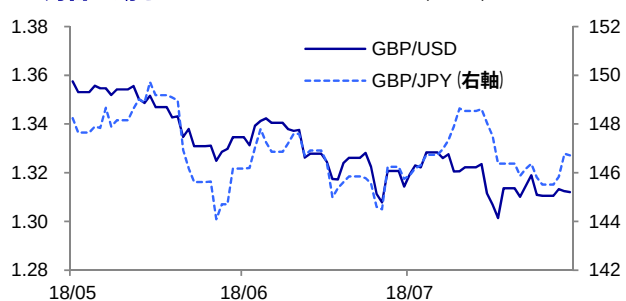
先月のポンド/ドルは上下に振れたがほぼ月初と変わらずで月越え。月初に発表された各種景況感指数が好調であったことに加え、英中銀からも利上げを示唆するコメントが出たこともありポンドの買戻しが序盤進む。一方ブレクジットについては、6日の特別閣議でメイ首相が当初よりもソフト・ブレクジット寄りの内容で閣僚と合意。これに不満を示したハード・ブレクジット派のデービス・ブレクジット担当相が8日夜に辞任したが、市場はソフト・ブレクジット期待から9日にポンド買いで反応し月中高値1.3363をつける。しかし9日午後と同じくハード・ブレクジット派のジョンソン外相が続いて辞任をする、相次ぐ重要閣僚の辞任で政権の基盤が揺らいでいることを嫌気しポンドは1%程度値を下げた。12日には前述特別閣議で合意したブレクジット方針に関する100ページにおよぶ白書が公表された。内容にサプライズがなかったこともありマーケットの反応は限定的だったが、翌13日に訪英中のトランプ米大統領が同方針を批判したと伝わるとポンド売りが強まったが、その後のメイ首相との共同会見でトランプ大統領が前発言を「フェイクニュース」と否定したことでポンドが買い戻される一面もあった。月後半は重い値動きが続く。17日には堅調な英5月雇用統計が英中銀の8月利上げ観測をサポートし一時ポンドが買われる場面もあったが、パウエル米FRB議長の議会証言で米中の貿易摩擦懸念の中でも緩やかな利上げを続ける方針が示されドル買いが強まるとポンドは反落。ドル買いが世界的に続く中、18日の英6月消費者物価指数の伸び率、19日の英6月小売売上高、といずれも市場予想を下回る結果が続いたことで8月利上げ期待にブレーキがかかりポンド売りが強まると1.30の台を割り込み月中安値1.2985をつける。ただ、トランプ米大統領が「ドル高は不利」との発言をしたと伝わると、日銀の緩和策修正への警戒もあいまって、20日にドル買いの巻き戻しが起こり、今度は1.31台まで回復。24日には「メイ首相がブレクジット交渉をコントロールする」との報道が伝わるとソフト・ブレクジットへの期待感からポンドの買戻しが進んだ。なお、24日より英議会はサマーブレイクに入った。25日の米国時間には、トランプ大統領と欧州委員会のユンケル委員長が貿易摩擦の緩和で合意したことでユーロが買われる動きにつられポンドも1.32台を回復する場面もあった。しかし26日には、EUのバルニエ交渉官が英側の関税プランを拒否したと伝わると1.31前半まで売られ上値の重さを露呈した。

■ 今月の見通し

今月のポンド/ドルも上値の重い展開を予想する。注目されるのは①英中銀の金融政策決定会合(2日)、②ブレクジット動向、③貿易摩擦の動向の3点。
①金融政策決定会合については、依然としてマーケットでは現状0.5%の政策金利から0.25%の利上げを見込む向きが8割程度と多い。前回の会合でホールデン氏が利上げ派にまわり、その後も英中銀委員が利上げを示唆するような発言を行ってきたこともあり利上げ期待が相応に高まっている。利上げ決定となった場合、初動はポンド買いで反応されても織込済みということで利食われる可能性が高そう。もちろん据置きとなった場合もポンドは弱含むことが予想されるため、ややポンド下落リスクの方が高いと思われる。
②ブレクジット動向については、今月は英国側からの新たな動きは期待しにくい。というのも英議会在が9月4日までサマーブレイクに入るため。マーケットは小康を得る可能性はあるが、今後のEUとの交渉スケジュールを考えると時間的には非常に苦しい(欧州委員会は交渉の最終期限を10月中旬としている)。メイ首相の白書はややソフト・ブレクジット寄りの内容となっているものの、もともとハード・ブレクジットを標榜していた当初の主張から変貌しており、与党保守党内での調整に苦心しているのは明らか。EU側も英国案をすんなり受け入れることは考えがたく、要求が突き返された場合の修正に時間がかかりそう。相次ぐ閣僚の辞任で政権基盤も盤石とは言えず、もし総選挙となった場合は時間がさらにとられることもあり、「ノーディール」でのブレクジットというナリオリが現実味を帯び始める。かかる状況の中、ポンドを積極的に買い進められる地合いではないと思われる。
③貿易摩擦については、世界的に景気への悪影響が懸念されており今後の展開に注意。直近ではIMFや欧州委員会が貿易摩擦のリスクを織込んだ結果として、それぞれ今年の世界経済成長見通しとユーロ圏経済見通しを0.2%引き下げた。今後の展開次第では、現状のドル買いの巻き戻しが起こりポンドにも買戻しが入る可能性には留意したい。

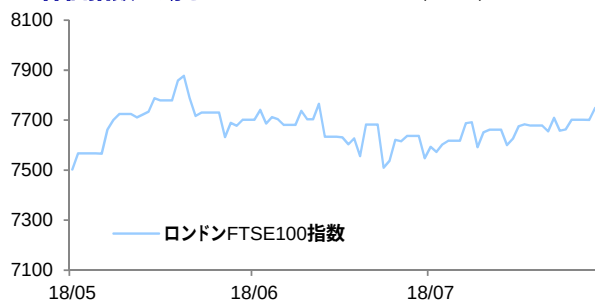
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/2	製造業PMI	6月	54.0	54.4	54.3
7/3	建設業PMI	6月	52.5	53.1	52.5
7/4	サービス業PMI	6月	54.0	55.1	54.0
7/10	鉱工業生産(前年比)	5月	1.9%	0.8%	1.6%
7/10	製造業生産(前年比)	5月	1.9%	1.1%	0.9%
7/17	ILO失業率	5月	4.2%	4.2%	4.2%
7/18	消費者物価指数(前年比)	6月	2.6%	2.4%	2.4%
7/19	小売売上高(含自動車/前年比)	6月	3.7%	2.9%	4.1%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.7250 ~ 0.7550
AUD/JPY 80.00 ~ 83.50

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 今村 加奈子

■ 先月の為替相場

7月、世界的な貿易摩擦懸念と欧米株式下落を受け、豪ドルは今年の最安値を更新し0.7311まで下落した。

7月初旬、豪ドルは、7400近辺で取引始まり、カナダが米国へ報復関税を發動し貿易摩擦懸念ムードが強まりアジアや欧州株式下落、豪ドルは売りに押され安値0.7311まで下落した。豪州準備銀行(RBA)理事会では予想通り政策金利を1.5%で据え置くことが決定され、声明では『低金利が経済を支援・今年と来年GDPは平均で3%を上回る見通し・2018年のCPI上昇は2%をやや上回る見通し・家計消費が不透明要因』などが示されたが新規材料はなく、豪ドルは材料探しの様相でしばらく0.73半ば～0.74半ばで横ばい推移となった。

7月中旬、貿易関税に関する新規材料を待つ中、豪ドルは高値0.7484まで上昇する局面があったが、6月にトランプ大統領が指示していた中国への2000億ドル追加関税10%のリストが発表されると、貿易摩擦に敏感な豪ドルは0.73後半へ値を下げた。その後、米6月インフレ率は予想通りの前年比2.7%や、中国4～6月期GDPの予想と一致した6.7%などを確認する中、0.7400を挟んだ商いが見られた。RBA理事会議事録では、6月の議事録で削除された『次の金融変更は恐らく利上げとの認識で一致』が再度盛り込まれたが豪ドルの反応は薄かった。

7月後半、上海株式続落を材料にして、豪ドルは一時0.73前半まで値を落としたが、7月初旬につけた安値0.7311を更新するまでには至らなかった。トランプ大統領から「強いドルは米国を不利な立場におく」のドル高懸念発言を受け、豪ドルは0.74前半へ値を戻した。25日に豪4～6月期インフレ率(全項目)は予想(前年比2.2%)より若干低い2.1%・基調インフレは予想通りの1.9%となり、0.74前半～0.74半ばで上下動した。26日、トランプ大統領と欧州連合(EU)が貿易障壁引下げに取り組むことで一致の報道の中、0.7400を挟んだ商いが続いた。

■ 今月の見通し

8月の注目点は6週間ほど続いている0.73台～0.74台の豪ドル横ばい推移に変化があるかどうか。

市場の焦点は、トランプ大統領と欧州連合(EU)の関税撤廃協議の行方や、軟調推移が目立つ欧米株式であり、最近では豪ドルに与える影響として人民元や上海総合株式の動向が加わってきている。

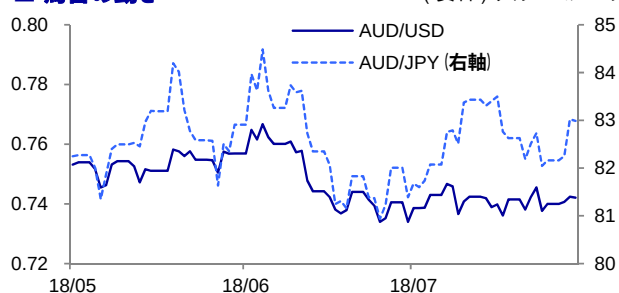
先月の米連邦準備銀行の連銀経済報告(ページブック)では、12地区連銀すべての製造業者から関税措置による懸念が示された。保護主義的な政策は世界の経済成長にとってリスクとの見方から、中国・米国などの株式市場は不安定な推移となっており、それが豪ドルの上値を塞いでいる。先月後半にトランプ大統領とEUは関税撤廃の協議開始で合意、米国と中国は通商協議を再開と報道されている。トランプ大統領は今年11月に米国中間選挙を控えていることから、何らかの貿易摩擦緩和策/解決策がこれから数ヶ月以内にあるようであれば、株式は上昇し輸出国である豪州の通貨・豪ドル買戻しの可能性も出てくる。

先月後半に発表された豪4～6月期インフレ率は、豪州準備銀行のインフレーターターゲットレンジ2%～3%の下限である2%近辺の結果となった。その低いインフレの他、豪州景気の現状は低水準の賃金の伸び・住宅市況の悪化から市場は豪州政策金利1.50%は少なくとも1年ほどは据え置きを予想している。その意味で豪ドル買い材料につながらない。

今年6月中旬以降の豪ドルは、0.73前半へ下落するがその水準での取引は長続きせずすぐに0.73後半へ買い戻される一方、0.74後半での取引も続かない方向性に欠けた展開である。下値サポート水準は今年の安値0.7311、次のサポートは0.7160で2016年12月の安値、上値レジスタンスは0.7495となり、今はどちらの水準をブレイクできるか、あるいはレンジ取引継続か注視される。

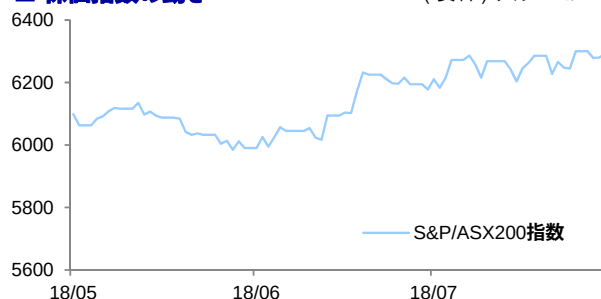
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/3	住宅許可件数	5月	0.0%	-3.2%	-5.6%
7/3	RBA 政策金利		1.5%	1.5%	1.5%
7/4	小売売上高	5月	0.3%	0.4%	0.4%
7/4	貿易収支	5月	A\$1200m	A\$827m	A\$472m
7/19	就業者数	5月	16.5千人	50.9千人	12千人
7/19	失業率	5月	5.4%	5.4%	5.4%
7/25	インフレ率(全項目) 前年比	4～6月	2.2%	2.1%	1.9%
7/25	トリム・インフレ率 前年比	4～6月	1.9%	1.9%	1.9%
7/25	加重平均インフレ率 前年比	4～6月	1.9%	1.9%	2.0%

(資料) ブルームバーク

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.2800 ~ 1.3200
CAD/JPY 82.00 ~ 87.00

グローバルマーケット業務部カナダ室 三木 順一郎

■ 先月の為替相場

6月末に発表された第2四半期のビジネスアウトLOOKサーベイの結果を受けて、7月の利上げは確実との雰囲気の中、USD/CADは1.315で7月入り。月を通じて概ね1.30～1.33のレンジで推移、月間高値は1.325(7/25)、月間安値は1.2983(7/31)。

7月に入ってからUSD/CADはじりじりと下値を試しつつ、6日に発表されたカナダ6月雇用統計の結果が良好なものであったことから、1.31を割り込む。雇用者数は2万人増加の予想に対して3.2万人の増加、平均時給の伸びも市場予想には届かなかったが年率3.5%と高い水準を維持。

11日のカナダ中央銀行政策金利決定会合では、市場予想通り25bpの利上げが実施された。世界的な貿易摩擦の激化に対する市場懸念の高まりから、ハト派なスタンスを予想する向きもあったが、カナダ中央銀行は同リスクを認識しつつも経済データ次第の緩やかなペースでの利上げ姿勢を維持するという前回会合と変わらぬスタンスを示した。

USD/CADは一旦は下落で反応し月初来の安値1.3065をつけるものの、以降は買い戻しの動きに。イベント通過とWTI原油価格が同日3ドル超の大幅下落となったことも背景に、1.32台まで買い戻された。

19日には、継続している人民元安を受けたコモディティ価格下落もあり、USD/CADは1.33に近接する局面もあったが、翌20日に発表されたカナダ5月小売売上高が非常に良好な結果となったことから、USD/CADは大幅に下落し1.31に近接、以降月末に向けてNAFTA交渉の再開に向けて3カ国から前向きとも取れるヘッドラインも背景としながら、緩やかながらも下値を試す展開に。

月末に発表された注目のカナダ5月GDPは前月比+0.5%とエネルギーセクターを中心に堅調な内容となり、カナダQ2GDPでのリバウンドが濃厚、USD/CADは発表後一時節目の1.30を割り込んだ。

■ 今月の見通し

注目のカナダ中央銀行の政策金利決定会合は事前予想通り今年に入って2回目の利上げとなった。彼らのスタンスは大きくは変わっておらず、ファンダメンタルズ次第の緩やかな利上げを継続するスタンスであることから、米国が予定通りの利上げを継続できる限り、カナダ中央銀行による年内もう一度の利上げを見込む。現段階では12月の会合、仮に夏の間にNAFTA再交渉で何らかの進展が確認できれば10月会合も視野に入ってくるイメージ。

今月は夏枯れを背景にスローな展開を予想するが、安値を更新する人民元、また日本にも長期金利誘導目標の柔軟化といった金融政策調整の可能性が表面化しつつあることから日本円の動きには十分な配慮を払いたい。

米国経済が堅調に推移しており、それはある程度浸透していることから、カナダドルには引き続き買い戻し余地はありと見る。秋に向けて濃淡こそあれ継続するであろう、米国を中心とした世界的な貿易摩擦の動向を注視しつつ、1.28台～1.32あたりのレンジ感で臨みたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地における夏の風物詩』

あくまで個人的にはですが、カナダの冬は地獄、夏は天国です。

夏になると皆が待ってましたと、非常に元気になるというのが実感ですが、これが一番ではないでしょうか。

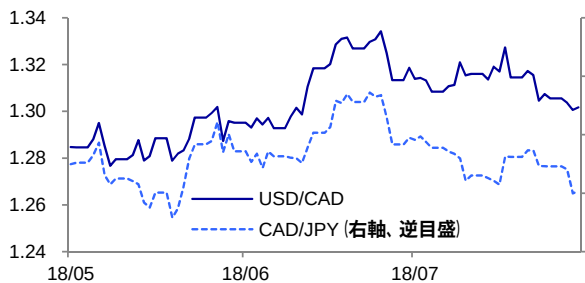
しかしその他で一つ挙げるとすると、7月1日のカナダデーでしょうか。

カナダの建国記念日ですが、至るところで花火が上がります。今年の7月1日は車でナイアガラを越えて米国に行ってきた帰りでしたが、高速道路からは360度至るところで花火が上がっているという状況を実感。また、自宅近所では夜10時30分から大掛かりな花火が打ち上がります。こんな時間からと当然思う訳ですが、夏は夜9時を過ぎてもまだ明るいのではないのでしょうか。道路も閉鎖されて混雑な中、皆でカナダデーをお祝いします。

また、カナディアンロッキーを訪れる良いシーズン。周囲によく勧められますが、近いうちに絵葉書に囲まれるような感覚を味わいに行ってみたいと思っています。しかし現実的にはスキーも兼ねて冬にというのが現実的なところ、というのが残念です。

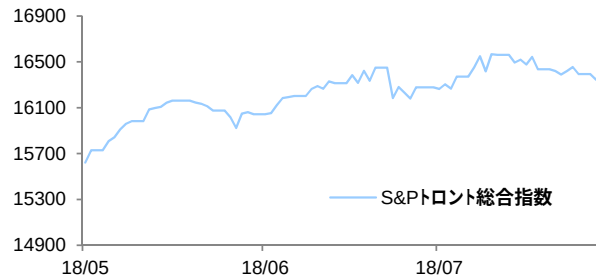
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/6	貿易収支	5月	-2.20b	-2.77b	-1.86b
7/6	失業率	6月	5.8%	6.0%	5.8%
7/6	雇用者数変化	6月	20.0k	31.8k	-7.5k
7/6	平均時給変化(前年比年率)	6月	3.7%	3.5%	3.9%
7/11	カナダ中銀政策金利	7月	1.50%	1.50%	1.25%
7/17	製造業売上高(前月比)	5月	0.4%	-1.2%	0.8%
7/20	小売売上高	5月	1.0%	2.0%	-0.9%
7/20	消費者物価指数(前月比)	6月	0.0%	0.1%	0.1%
7/20	消費者物価指数コア(前年比年率)	6月	2.3%	2.5%	2.2%
7/31	GDP(前月比)	5月	0.3%	0.5%	0.1%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW 1090 ~ 1130
 KRW/JPY 9.852 ~ 10.204
 JPY/KRW 9.80 ~ 10.15

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

ソウル資金室 下山 泰典

■ 先月の為替相場

先月のドル/ウォン相場は、上に行ってこいとなった。引き続き米中貿易摩擦が懸念される中で、特に人民元相場との連動性が意識される相場となった。

月初は1114.20でオープン。4日に中国人民銀行(PBOC)による人民元相場安定化に関する言及があったことや、6日の米中相互関税賦課発動が市場予想の範疇に留まったことなどを受けて、翌9日には今月安値となる1109.70まで下落する。

しかしその後、米国の中国に対する2,000億ドル規模の追加関税リストが公表されたことや、20日にはPBOC仲値が大きく人民元安で設定されたことなど一連の流れの中で同日1138.90の今月高値をつける。

それでも、米国内でトランプ大統領のFED批判でドルが下落し、また、25日には米欧首脳会談で貿易戦争回避の方向で合意がなされたことなどを背景に、ユーロやカナダドル、人民元などを中心にグローバルなドル安となったことを受け、ドル/ウォン相場は30日に1113.40まで下落。1118.70でクローズした。

なお、12日に開催された韓国銀行の金融通貨委員会では、市場予想どおり政策金利は据置きとなった。しかし、1名が利上げ票を投じており、これは注目に値する。1名の反対意見の出た次回会合で、利上げを実行するといった行動パターンが見られるためだ。今会合後の総裁会見では、今後の利上げに関しては状況次第といったトーンが見られたが、少なくとも利上げをするための素地作りは必要との認識だったのだろう。米韓の政策金利差が開く中、市場ではコンセンサスとまではいえないものの比較的多くの参加者が今年1度の利上げを見込んでいた模様。現在の韓国のファンダメンタルズを考えれば、利上げはできて1回との見方が大勢だが、今後の政策運営には注目したい。

■ 今月の見通し

今月のドル/ウォン相場は下落する展開を予想する。

米中貿易摩擦等を受けた市場のリスクセンチメントが引き続き意識されよう。それでも、11月の米国の中間選挙が徐々に近づく中、トランプ大統領としても実経済/企業活動に悪影響を与えようような強硬的な路線は一旦控えるのではないかと考えている。また、現対立国・地域として焦点の当たる中国や欧州でも、米国と事を構える事態にまでは発展させたくないというのが本音だろうから、ある程度のところで事態は徐々に収束に向かうとみている。

かかるような状況となれば、まずは比較的好調な米国の企業業績等も手伝ってグローバルにリスクセンチメントは改善しようし、8月の韓国中銀の金融通貨委員会での利上げ実施の可能性も出てくるだろう。この先、韓国経済はやや減速するとの見方が出ている中、韓国中銀としては、米国との政策金利差が一段と拡大することに警戒感を持っている模様。かかる中では、できるだけ利上げを行いたいとの意向もあろうし、7月会合時に1名の反対意見という形でその素地を作っているため、貿易摩擦の動向が落ち着いていれば月中旬以降、利上げの機運が急速に高まる可能性もあると考えている。

そうなれば、再び1100を割り込み、ウォン高が進行する展開も考えられるだろう。

但し、上記はあくまでリスクセンチメントが改善し、かつ利上げの機運も高まった際の予測。足元で米国が関税引き上げの対象にしているのは、自動車や鉄鋼など韓国が得意とする分野が目立つ。韓国が1対1で名指しされているわけではないが、株式相場への影響は不可避だろうし、最近のドル/ウォン相場は人民元相場との連動性が強く意識されており、為替にも直接的・間接的に影響が及ぶ。

上記を勘案すれば、基本線はウォン買い優勢の展開を予想しているが、情勢が極めて流動的に変化しうるため常に警戒を怠らないようにしたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地における夏の風物詩』

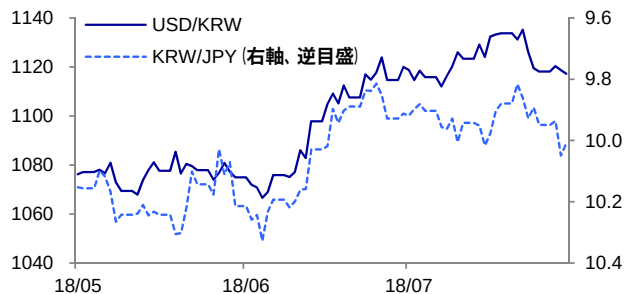
韓国の夏の風物詩といえば、「伏日(ボンナル)」の行列でしょう！韓国がお好きな方でもあまり聞いたことのない言葉かもしれません。日本でいうところの「土用の丑の日」のようなイメージで、この日には韓国では「サムゲタン」を食べるんです。

この日のサムゲタン屋さんの行列はスゴイ！先日、香港からの出張者(日本人)が来た際にサムゲタン屋さんに行ったんですが、ちょうどその日が「伏日(ボンナル)」だったんです。いつもはさっと入れるはずのそのお店の外には見たことのない行列が……。ざっと30人ぐらい並んでいたでしょうか。今年の韓国の夏は、観測史上まれに見る暑さで、その日もかなり暑かったのですが、それでも外に30人…。韓国の人がどれだけこの日を大事にしているか、楽しみにしているかを感じた気がします！韓国での初めての夏を経験中の私としては、そんな日があるということすら知らず。もちろん、僕ら日本人は迷わずにそのお店から撤退いたしました。。。

このほか、冷麺やソルビン(かき氷)など、韓国には夏に美味しいグルメもたくさん！南北融和が意識されつつある最近は特に、平壤冷麺も人気急上昇中！夏休みのご旅行の選択肢の1つとしていかがでしょうか？(下山)

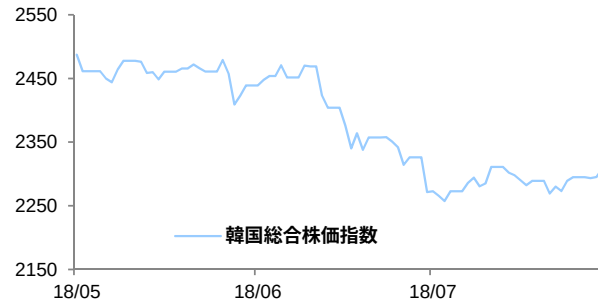
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	輸出(前年比)	6月	2.2%	-0.1%	13.5%
7/1	輸入(前年比)	6月	12.5%	10.7%	12.6%
7/3	CPI(前年比)	6月	1.7%	1.5%	1.5%
7/5	経常収支	5月	-	\$8680.6M	\$1768.2M
7/11	失業率	6月	3.9%	3.7%	4.0%
7/12	韓国銀行 政策金利公表	-	1.50%	1.50%	1.50%
7/26	GDP(前年比/速報値)	2Q	2.9%	2.9%	2.8%

(資料) ブルームバーク

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 30.20 ~ 30.80
TWD/JPY 3.59 ~ 3.74

台北資金室 三浦 勇二

■ 先月の為替相場

7月のドル/台湾ドル相場は、30.5を挟んで方向感の出難い展開が続いた。

月初のドル/台湾ドルは30.510でオープン。海外時間のドルインデックスの軟調な推移を受けてドル売り台湾ドル買いが先行。一時30.400をつけるも、その後は人民元安が進むにつれ、ドル/台湾ドルも7/3にかけて30.639まで上昇。しかしながら、中国人民銀行易総裁の人民元安けん制発言によりドル/人民元が急落すると、ドル/台湾ドルも30.5割れ。7/6の米中の追加輸入関税措置発動後は悪材料出尽くし感から株が堅調に推移し、台湾株への海外資金の流入が膨らんだこともあり、ドル/台湾ドルは台湾ドル買い優勢で推移し、7/10には7月の安値となる30.305まで下落した。

しかしながら、その後はドルの底堅い推移や、米国が2,000億ドル相当の対中追加輸入関税リストを公表するとの報道を嫌気した株安からドル買い台湾ドル売り地合いが強まったほか、原油価格の大幅な下落から対資源国通貨でドル高が進んだことも影響し、ドル/台湾ドルは7/12に30.6台へ反発。

その後、30.5台を中心とした狭いレンジ内での推移が続いたが、米上院で行われたパウエルFRB議長の議会証言では、特段目新しい内容はなかったものの、ハト派的な発言もなく、ドル高へつなぐと、ドル/台湾ドルもドル買い台湾ドル売り優勢での推移となった。人民元安や大口配当に絡む台湾ドル売りフローも相俟って、7/20には2017年3月以来の30.7台へ上昇した。

一方、トランプ米大統領がFRBの利上げに対して不満を示し、強いドルは米国を不利な立場に置くと発言したことや、「ドル高が我々の競争力を奪っている」、「中国やEU、その他の国々は通貨を操作し、金利を低くしてきた」と他国の通貨安誘導を批判する発言を行ったことを受けてドル安につながると、ドル/台湾ドルは上値重く推移。月末にかけては輸出企業のドル売りフローも増え、30台半ばへ軟化する展開となった。

■ 今月の見通し

8月のドル/台湾ドル相場は、上値の重い推移を見込む。

7月に発表された経済指標をみると、6月の輸出額が前年比+9.4%と、4か月連続でのプラス成長を記録。単月ベースで282億ドルと、前月からは小幅に減少したものの、依然として高水準で推移。内訳をみると、仕向け地別で全体の4割超を占める中国・香港向けが前年比+10.1%と高い伸びを示し、製品別でも主要輸出品の電子部品が堅調に推移しており、米国、中国の貿易摩擦問題への懸念は残るが、足元は輸出の好調さが維持されているということが確認できる内容となった。なお、貿易収支は52.1億ドルの黒字で、引き続き、高水準の貿易黒字が継続。4月の消費者物価指数は前年比+1.31%と、前月の同+1.64%から物価の伸びが鈍化。価格変動の大きい生鮮食品を除いたコア消費者物価指数は同+1.30%と、前月の同+0.95%から伸びが加速する結果となった。

8月は引き続き、台湾株における海外投資家の動向が注目されるほか、米国の通商政策や経済指標の結果が注目される。

台湾の株式市場における外国人投資家の資金については、2018年2月よりか月連続での資金流出が続いており、足元の台湾ドル安の要因のひとつとなっている。7月においては、第2週目以降、株価が堅調に推移し、前月までに比べるとやや流出規模は縮小しているものの、米国が利上げを続ける中、資金流出しやすい環境は続いていることから、8月以降も注視が必要と考えられる。

米国の通商政策については、7月に中国への追加輸入関税措置が発動されたが、課税対象拡大に関し、動きがみられるかどうか注目される。経済指標では、6月に発表された住宅関連指標で悪化がみられており、利上げによる経済への悪影響が広がっていくかどうかという点も注目される。

■ 今月のつぶやき (現地からの声)

『当地における夏の風物詩』

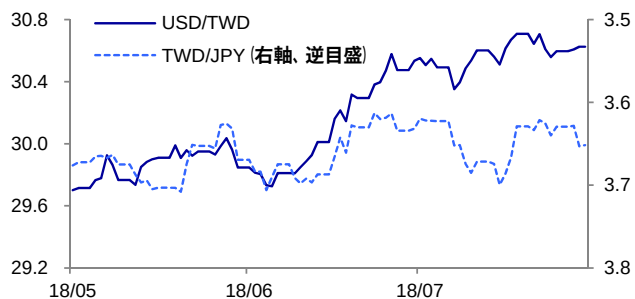
台湾の夏の伝統行事としては、中元節が有名です。

旧暦の7月1か月間は鬼月と呼ばれ、そのちょうど中間にあたる7月15日が中元節とされています。鬼月には霊界の門が開き、霊が下界に下りて来ると言われており、霊を迎える準備として、会社やお店、住宅の前にはお供え物の果物や食品が並べられ、線香を焚いて鬼供養を行います。

なお、中元節に合わせたイベントの内容は地域によって大きく異なりますが、台北市の隣に位置する基隆市の「鶏籠中元祭」は台湾最大規模で最も有名です。旧暦の7月1日に霊界へつなぐ門が開くのに合わせて儀式を行うのを皮切りに、12日に主普壇(中元祭祀文物館)の点灯式、14日に放水燈遊行と呼ばれるパレードなど、1か月間に渡り、連日イベントが行われ、海外からも多くの観光客が訪れるようです。

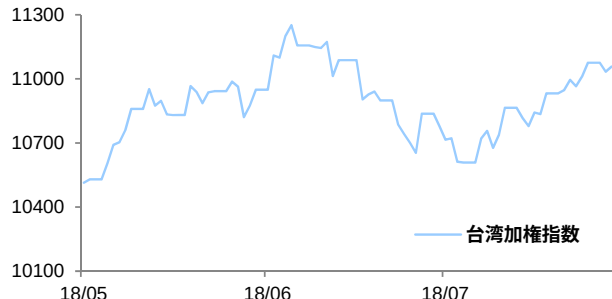
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
7/5	CPI (前年比)
7/5	外貨準備高
7/9	輸出 (前年比)
7/9	輸入 (前年比)
7/9	貿易収支
7/20	輸出受注 (前年比)
7/23	鉱工業生産 (前年比)
7/23	失業率
7/31	GDP (前年比)

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
6月	1.54%	1.31%	1.64%
6月	-	457.12B	457.28B
6月	10.30%	9.40%	14.20%
6月	15.40%	15.40%	12.00%
6月	4.90B	5.21B	4.41B
6月	7.40%	-0.10%	11.70%
6月	5.00%	0.36%	7.61%
6月	3.70%	3.68%	3.69%
Q2	2.83%		3.02%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.8400 ~ 7.8500
HKD/JPY 13.75 ~ 14.30

香港資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【7月の香港ドル直物相場】

今月の香港ドル相場は、7.8421から7.8499間での推移となった。米ドルの堅調地合、香港株・人民元の下落という環境の中で、香港ドルは比較的底堅く推移し、ペッグ制下での取引下限である7.85に達することはなかった。このことは、人民元が大幅に下落しているものの、中国や香港から深刻なレベルの資本流出は起きていないことを示している。Fedによる緩やかな利上げ方針が続く中、香港から米国への資金還流は緩やかなペースに留まり、香港ドルマーケットは概して安定を保った。大幅な人民元安やマーケットの不確実性高まりの中で、香港ドルの対米ドルペッグは効果的に機能し、ペッグ制の放棄・見直し等の思惑はすっかりと鳴りを潜めている。1年物の香港ドルフォワードポイントは▲400近辺で推移した。

【7月の香港ドル金利市場】

米FOMCが無い今月、香港ドル金利市場は主に国内の需給に左右される展開となった。ドル香港ドルスポットレートが7.85に到達しなかった為、HKMAの決済性預金残高は1,096億香港ドルから殆ど変化することはなかった。IPOに伴う株式購入需要や半期末の季節性の要因が剥落したことで、1ヶ月物の香港ドルHIBORは2%から一時1.62%まで低下し(香港ドルHIBOR-米ドルLIBORのスプレッドは▲45bpsまで拡大)、その後1.9%近辺まで再び上昇(HIBOR-LIBORのスプレッドは▲20bpsまで縮小)した。一方で、3ヶ月物のHIBOR及びHIBOR-LIBORスプレッドは、それぞれ2%、▲20bpsで殆ど変らなかった。3か月物のHIBORが安定的に推移する中で、3年物・5年物のIRS金利はそれぞれ2.6%、2.7%に低下した。

【7月の香港株式市場】

米中貿易摩擦や人民元安は、香港株センチメントを軟化させ、ハンセン指数は一時10か月ぶりの安値水準である27,746近辺まで下落した。ストックコネクト経由での資金流出は拡大したものの、足許そのペースは落ち着きを見せている。貿易戦争と経済成長の鈍化を受けて、中国当局は財政政策・金融政策で緩和色を強めている。更なる景気刺激策への期待感から、その後人民元及び中国・香港株はやや反発した。

■ 今月の見通し

【8月の香港ドル直物相場】

8月の取引レンジは、7.84-7.85と予想する。次回の米FOMCで政策変更は無いと考えられ、香港ドル市場は比較的静かなものとなるだろう。Fedの緩やかな利上げ方針が変わらない限り、ジャクソンホール会合で大きなサプライズはないだろう。香港からの資本流出圧力が大きく拡大しなければ、香港ドルは人民元安や通商摩擦懸念が燃る中でも比較的底堅い推移となる。

【8月の香港ドル金利市場】

今年最大のIPO案件と見られるチャイナ・テレコム(最大680億香港ドル規模)の香港株式市場への上場は、ディフェンシブ銘柄ゆえに人気白熱するとは考えにくい。そのため、香港ドルの流動性への影響は限定的となり、香港ドル金利も動意づくことはない予想する。スポットレートが7.85に達する見込みは低く、香港ドルの流動性状況を図る尺度として認識されている、HKMAの決済性預金残高にも大きな変化は無いだろう。

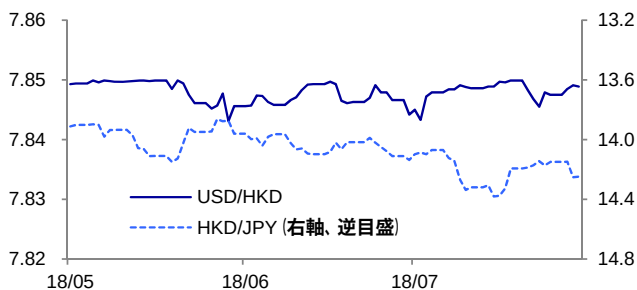
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

【当地における夏の風物詩】

香港は沿岸部に位置する都市であり、最も人気の夏のイベントはウォータースポーツです。クルーザーを貸し切り、ウェイクボードを楽しむことはもっとも人気のある週末の過ごし方の一つ。週末にもなると、香港の船着き場は貸切クルーザーを楽しむ人々でにぎわいます。また、ビーチに行くことももう一つの選択肢です。レパルス・ベイやクリアウォーター・ベイ、スタンレーなどは香港で有名なビーチです。海は透き通っており、砂浜もきれいです。とても素敵な場所ではありますが、この時期はとても暑く、そして人も多いのが難点。日焼け止めを塗るのを忘れると大変なことになりますのでご注意ください！

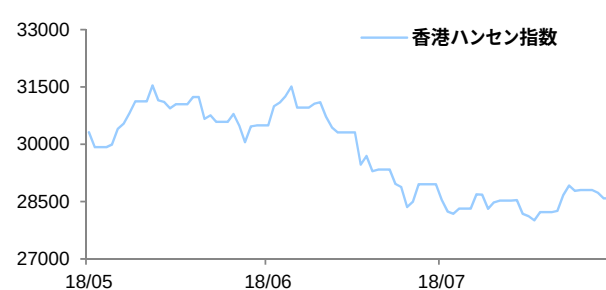
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/3	小売売上高(価額、前年比)	5月	12.0%	12.9%	12.2%
7/3	小売売上高(数量、前年比)	5月	9.8%	11.6%	11.0%
7/6	外貨準備高	6月	-	\$431.9b	\$432.1b
7/19	失業率(季調済)	6月	2.8%	2.8%	2.8%
7/23	CPIコアジョット(前年比)	6月	2.2%	2.4%	2.1%
7/26	輸出(前年比)	6月	7.9%	3.3%	15.9%
7/26	輸入(前年比)	6月	8.2%	4.4%	16.5%
7/26	貿易収支(HKD)	6月	-52.0b	-54.1b	-43.2b
7/31	財政収支(香港ドル)	6月	-	-	-11.1b
7/31	マネーサプライM2(HKD/前年比)	6月	-	-	7.7%

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	6.4500	～	6.9000
	CNY/JPY	15.36	～	17.36
	100JPY/CNY	5.7600	～	6.5100

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 矢野 慧

■ 先月の為替相場

【為替相場】

7月のドル人民元相場は、前月に続き米中貿易戦争懸念よりドル高人民元安進行。

月の前半、米中貿易戦争に対する懸念や中国6月製造業PMIが低調な結果となったことを受け中国経済減速が意識され人民元安が進行。6.62付近から一時6.72付近までドル高人民元安進行するも、3日迄に中国人民銀行(PBOC)の要人が相次いで人民元安を牽制する発言をしたことで反転し6.6台前半までドル人民元は下落。

6日には米国の対中関税の発動及び中国側の報復関税の発動がなされるも、事前に織り込まれていたこともあり、6.60付近まで水準を下げる。しかし10日に米国が中国に対する2,000億ドル相当の追加制裁関税の対象品目を発表すると、再び人民元安が進み一時6.70を超える水準へ。

16日の発表された中国4-6月期GDP成長率は前年同期比+6.7%と1-3月期の同+6.8%から小幅減速。米中通商問題の実態経済に与える影響が意識されたのに加えて、米国が漸進的な利上げ継続について言及したことで、ドル高人民元安が加速。ドル人民元は一時6.8を超える水準まで上昇。その間国家外貨管理局が反循環的調整要因の再開を示唆する場面もあったものの、元安を食い止めるには至らず。

月の終盤に掛けては人民銀行が新規にて中期貸出制度(MLF)を実施したことや、中国国務院が内需拡大に向けた財政政策を発表したことで、金融政策の緩和方向への調整が意識され6.83を超える水準へ。1ヶ月間で3%程度人民元安が進む結果となった。

【金利相場】

5日は7月に発表された預金準備率引き下げ(50bp)が実施。更に半期末を越えて中資系大手行中心に資金放出ニーズが強まり、資金需給は大きく緩和し金利はカーブ全体で連日大幅に低下。

その後も公開市場操作での資金供給や、23日には単一では過去最大となる金額でMLFが実施されるなど、資金流動性は維持され金利は総じて低位安定推移。

■ 今月の見通し

【為替相場】

8月のドル人民元相場は、引続きドル高人民元安が進み易い地合を想定。米国とEUが関税撤廃交渉に合意する一方で、米中通商問題には進展が見られていないことや、GDPの低下などファンダメンタルズ悪化から、引続き元安圧力が強まり易いと思われる。

中国国内では内需拡大に向けた財政政策を発表するなど、緩和的な動きも見られており、今後も預金準備率引き下げなど、緩和的な方向への金融政策の微調整が継続すれば、人民元金利が低下し米中金利差が縮小、ドル買い人民元売りが加速する可能性がある。

一方で国家外貨管理局が示唆したように、為替市場の短期的な変動を緩やかにすべく「反循環的調整要因」を再開させるとの見方も強まっている。2015年11月のドル人民元が6.90付近まで元安進行した局面で、「反循環的調整要因」は導入されており、元高へ反転するきっかけとなった。更に過去の元安局面では外貨リスク準備金の積み立てなどを行ってきており、当局の動きには注意が必要。

【金利市場】

8月は引続き潤沢な流動性が維持され、金利は低位安定推移を想定。直近ではMLFの新規実施や、内需拡大に向けた財政政策、従来のデレバレッジに向けた動きに対しての見直し策を発表するなどしており、今後も景気下支え、資金流動性維持すべく預金準備率引き下げなどの緩和的な措置が取られる可能性あり金利の低下圧力がかり続けられると思われる。一方で財政政策等で実態経済が上向き、株価上昇に繋がれば債券価格下落、中長期ゾーンの金利上昇に繋がる可能性も。米中通商問題に燃る中、当局のスタンスと実態経済に対する影響には警戒。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地における夏の風物詩』

当地における夏の風物詩と言えば、ザリガニ・スイカ・涼麺等の食べ物です。

日本ではほとんど食されることのないザリガニですが、当地では夏になると、ザリガニにビールが鉄板。スパイシーな味付けをされたザリガニを、手袋をしながら皮を剥いて食べ、ビールを一口。これが暑い夏には欠かせないようです。

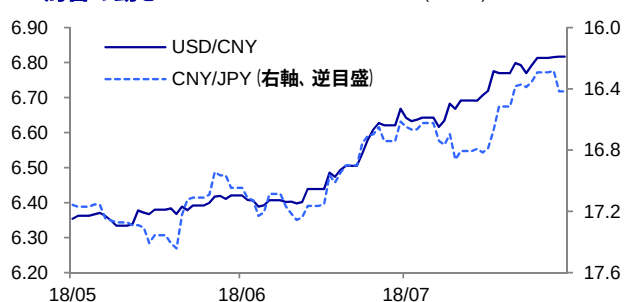
更に中国はスイカも豊富。街の果物屋でスイカが山積みになっているのをよく見かけるのですが、とにかく価格が安い。500グラム当たり1～2元というような値段設定であり、大玉スイカでも日本円で400円程度で食べられます。安いこともあり、飲食店などでも良く出てくる為、夏にスイカを食べる機会は非常に多いです。

最後は涼麺。日本で言う冷やし中華です。日本のようにコンビニでも売られています。日本の冷やし中華では具材はキュウリやハム、錦糸卵、紅ショウガなど、タレは醤油ダレやゴマダレがポピュラーですが、涼麺は違うようです。名前は涼麺で同じでも地方によって味付けも具材も違うようで、ある方の家の涼麺は具材はピーマン、ニンジン、お肉、タレはピーナッツダレを使っているよう。香ばしいピーナッツダレが絶品のようです。

このように当地の方は暑い夏を美味しい食べ物で乗り切っているようです。是非夏の中国に来られた際は食べてみてください。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/10	PPI (前年比)	6月	4.5%	4.7%	4.1%
7/10	CPI (前年比)	6月	1.9%	1.9%	1.8%
7/13	貿易収支 (RMB建)	6月	187.0B	261.9B	152.1B
7/13	輸出 (RMB建) (前年比)	6月	4.0%	3.1%	2.8%
7/13	輸入 (RMB建) (前年比)	6月	12.6%	6.0%	15.6%
7/16	小売売上高 (前年比)	6月	8.8%	9.0%	8.5%
7/16	鉱工業生産 (前年比)	6月	6.5%	6.0%	6.8%
7/16	GDP (前年比)	2Q	6.7%	6.7%	6.8%

(資料) ブルームバーク

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3500 ~ 1.3800
SGD/JPY 79.50 ~ 83.00

アジア・オセアニア資金部 前川 真也

■ 先月の為替相場

7月のシンガポールドル(SGD)相場は、米中貿易摩擦に関する報道やトランプ米大統領によるドル高懸念発言を受けて、1.35台前半から1.37台半ばのレンジで上下に大きく振れる展開となった。

第一週、2日米国の中国製品に対する制裁関税の発動を6日に控え、米中貿易摩擦激化に対する警戒感が強まる中、ドル買いが強まり、SGDは1.36台前半から1.37付近まで売られる展開。3日は翌日の独立記念日を控え、ドル売りが優勢となり1.36台半ばまで軟化。4日は米祝日のため市場参加者少なく、取引は閑散。5日発表された米6月雇用統計では非農業部門雇用者変化は市場予想を上回ったが、平均時給の伸びが市場予想を下回ったことから、ドルが軟化する流れに、SGDは1.36台半ばから1.35台後半まで買われる展開となった。

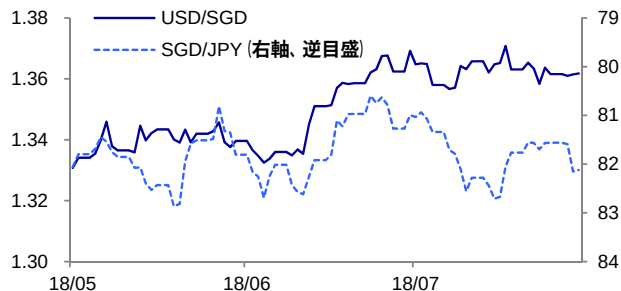
第二週、9日は英国のデービスEU離脱担当相とジョンソン外相が辞任したことで、英国のEU離脱の行方が不透明となり、ポンドが売られドル買いが強まる中、SGDは1.35台前半から1.35台後半まで売られた。10日トランプ米政権が中国に対して追加の2000億ドルの関税リストを準備していると報じられるとドルは軟化、SGDは1.35台半ばまで買われた。11日発表された米6月PPIが市場予想を上回り、ドル買いが優勢となる中、SGDは1.36付近から1.36半ばまで下落。12日発表となったSG小売売上高は市場予想を下回るも前回分が上方修正されたことで反応は限定的となった。13日SG4～6月期GDPは市場予想を下回ったことから、SGDは1.36台前半から1.36台後半まで下落する展開となった。

第三週、17日パウエルFRB議長が米国経済に対する楽観的な見方を示した他、漸進的な利上げを続ける方針を述べるとドルが買われ、SGDは1.36前半から1.36半ばまで下落。18日、19日とドル買いの流れは継続するも、20日トランプ米大統領がFRBの利上げに対して不満を表明したことでドルは急落、SGDは1.37付近から1.36前半まで買われる展開となった。

第四週、23日先週末のトランプ米大統領によるドル高懸念発言や日銀の政策変更に関する思惑等が手掛かりとなり、1.36台前半でオープン。1.36台半ばまで売られる場面も見られた。24日、25日は再びドル売りのながれとなり、SGDは1.36台半ばから1.35台後半まで買われた。26日はECBのドラギ総裁記者会見での2019年夏までの低金利維持方針が発表されたことを受けて、SGDは軟調に推移した。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 今月の見通し

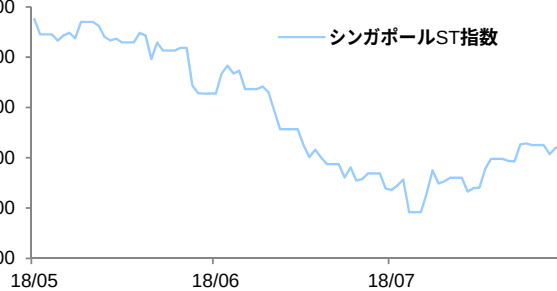
8月のシンガポールドル(SGD)相場は、ドル高地合いに大きな変化なく、SGDの弱含み推移を予想。引き続き、米中貿易摩擦を巡る報道を受けたリスク選好が相場を左右する展開となろう。

先月中旬発表されたシンガポール2QGDPは、若干市場予想を下回ったものの、引き続き高い成長率を示し、シンガポール経済の好調さを維持する内容となった。一方、米国は保護主義的な通商政策を強め、米中貿易摩擦が激化している状況下、世界経済への悪影響を懸念したリスクオフ姿勢から、当面はドル買いが優勢となろう。米中貿易戦争に関してトランプ政権は強硬姿勢を転換する様相は見られず、米中通商交渉が進展ないまま、トランプ大統領が現在検討中の2000億ドル相当の中国製品に対する追加関税の賦課に踏み切るリスクはある。また、約1年ぶりの安値水準まで下落した人民元、高値圏で推移する米国株、日本株、中国株が下押しする局面ではリスク回避ムードが広がる可能性もあり、警戒が必要となる。

先月下旬トランプ米大統領によるドル高・政策金利の引き上げに対する懸念発言を受け、ドル買いに一時的な調整が入ったが、米国は第2Q入り後、景気拡大ペースが加速、物価上昇も明確になっていることから、それだけに、FRBが利上げペースを鈍化させることは考え難く、ドル買い地合いが続くと想定される。

■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 今月のつぶやき (現地からの声)

『当地における夏の風物詩』

当たり前ですがシンガポールは、基本的に常夏ですので夏の風物詩と言われても正直困ってしまいます。ただ、日本の夏のタイミング合わせて風物詩というのであれば、やはりF1がぴたりとはまる感じでしょうか。ご存知の方も多いかと思いますが、F1シンガポールグランプリは2008年から開催、モナコのような市街地レースかつナイトレースという特徴のあるレースです。経済効果は約100億円とも言われ、その巨額の開催費用の相応分をシンガポール政府が負担しています。実はF1の開催契約は5年で、2017年に契約更新がされないのではという噂がありましたが、結局2021年まで延長されており

ます。実際、私もシンガポール赴任の最初の年に家族連れでこのレースを観戦しましたが、間近で見るレーシングカーを見てその迫力に圧倒されました。一方で圧倒されたという意味では、その料金にも圧倒されます。単なる立ち見席且つ予選の金曜日でも1万円程度、観覧席3日分となれば数十万円ということでもはや圧倒というよりも意味不明です。しかも立ち見席では、混雑しているとスペースがなかなか見つからず、子供を肩車し本人は見えずという鬼のようなシチュエーションに陥ります。

本当の車好きであれば、たまらない環境ですが、そこまでのレベルではない私は当然2年目から完全に興味を失っております。しかしながら、街中でレースが行われることで鉄柵が張り廻らされ始めるとまたその季節がやってきたと感じることができるとも確かで、そういう意味では十分風物詩の条件を満たしていると言えると思います。今年9月14～16日に開催予定ですので、時間とお金を持て余している方は是非お試しください。(宮地 崇)

■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/2	購買部景気指数	6月	52.5	52.5	52.7
7/12	小売売上高 (前年比)	5月	0.5%	0.1%	-0.6%
7/13	GDP (前年比)	2Q	4.1%	3.8%	4.3%
7/17	非石油地場輸出 (前年比)	6月	7.8%	1.1%	15.5%
7/23	CPI (前年比)	6月	0.6%	0.6%	0.4%
7/26	鉱工業生産 (前年比)	6月	3.3%	7.4%	12.9%

タイパーツ相場

予想レンジ:

USD/THB 32.50 ~ 33.50
THB/JPY 3.30 ~ 3.40

バンコック資金室 井上 由貴

■ 先月の為替相場

○ドルパーツは年初来高値を更新し、続伸

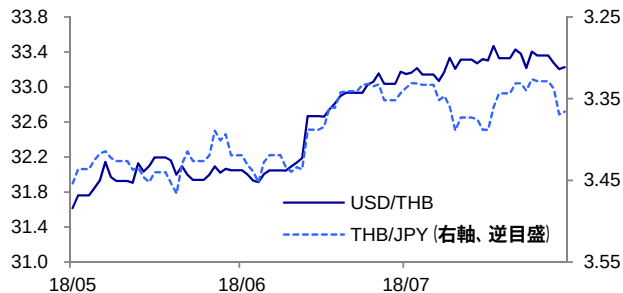
上旬、ドルパーツはレンジ推移。月初2日、33.00ちょうど近辺でオープン。タイ6月消費者物価指数が発表され、前年比+1.38%と5月同+1.49%から減速したことで、利上げへの期待感が後退したことから33.10台前半へ上昇。その後も米中貿易摩擦を巡り人民元の急落し、アジア通貨全面安となったことをきっかけに3日にかけて33.20台後半まで上値を伸ばした。その後人民元安が介入等を通じて落ち着くとドルパーツも次第に上値が重くなった。その週末に米中が関税を発動したことで悪材料が消化されたとの見方が拡がり人民元が上昇すると、週明け9日にはパーツ買いフローが入りドルパーツは月安値水準となる33.00台前半まで下落。

中旬、ドルパーツは上値を試す展開。10日は前日の反動からドル買い戻しの動きが入る展開となり、12日にかけて33.30台後半まで上昇。しかしウィラタイ・タイ中銀総裁から「タイ中銀はパーツ変動をマネージすべく介入することも可能」「外貨準備の減少は介入の結果」との発言が伝わると33.20パーツまで急落した。13日、中6月貿易統計にて対米貿易黒字が過去最高となると、米中通商摩擦への懸念が根強い中、人民元売りに連れる形でドルパーツも再び上昇基調となり、33.30台後半まで上昇するも、中銀の介入が意識される中で上値は押さえられた。しかし17日にパウエルFRB議長の議会証言において前向きな景気認識が示されると米2年債利回りが10年ぶりの水準へ上昇する動きに連れ、ドルパーツは再度上昇を開始。20日には人民元が大幅安となる展開に、ドルパーツもパーツ安が進行し、月高値となる33.50近辺まで上昇した。

下旬、ドルパーツは上値の重い展開。20日に月高値を記録した後は、中銀の介入が意識されたことや、6月貿易収支において黒字幅が市場予想比大きかったこともありドルパーツは下落に転じる。その後、「トランプ大統領が年内あと2回の利上げを懸念している」との報道もドル売り材料となり、33.30台前半まで下落した。週明け23日は債券市場からの資金流出が続き、ドルパーツは33.40台前半まで上昇。米中貿易戦争関連で新しい材料が出なかったこともあり、グローバルにドル買戻しとなりドルパーツは底堅い展開となった。24日も人民元の基準値が元安方向に設定されたことを受けて一時33.40台後半までパーツ安が進行するも、上値は限定的。米欧首脳会談を控えた様子見ムードもあり、じりじりと33.30割れまで値を下げた。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 今月の見通し

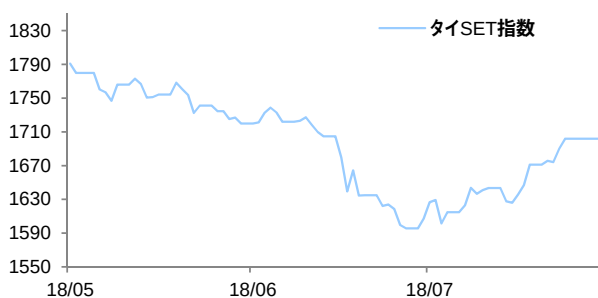
○ドルパーツは上値の重い展開を予想する。

引き続き米中貿易戦争は解決の糸口が見えず、マーケット全体に重くのしかかっている。中国側は新たな関税がもはや出来なくなっており、人民安誘導でもって対抗するなど、通貨安戦争の様相を呈してきている。足元タイパーツは人民元との相関性が強い傾向にあり、人民元安が急激に進行する局面ではパーツも連れ安となる可能性が高く、注意が必要である。

ただ、パーツ固有の要因に目を向けると、ドルパーツの上値も限定的であると考えられる。まず、週次でタイ中銀が公表している外貨準備高のデータによれば、パーツ高の進行とともに約1年半に亘って増加の一途を辿っていた外貨準備高は4月半ばを境に減少に転じている。先月ウィラタイ総裁が「タイ中銀はパーツ変動をマネージすべく介入することも可能」と久々の口先介入を行っているほか、外貨準備の減少は中銀がパーツ買い介入を実施した結果と読み取ることが出来る。今後もパーツ安が急速に進行する場面では中銀が動くと考えていて良いだろう。もっとも、中銀にとって明確な防衛ラインのようなものがあるとも思えず、年初来大幅にパーツ高が進行していたことを考えれば、足元のパーツ安はタイの輸出産業にとってみてもフェイバーであることから、中銀が必死になってパーツ安進行を止めようとしているわけではなく、あくまでスピード調整の目的であろうことは確認しておきたい。次に、タイ債券市場協会(TBMA)が公表している外国人投資家のタイ債券売買動向に関して言えば、7月単月ではネットで売り超(資金流出)であったが、金額はわずかTHB1Bioにも満たず、年初来でTHB100Bio超の流入超を記録しているタイ債券市場からすると微々たるもの。資金流出が深刻化している周辺国とは一線を画しており、米中貿易摩擦を背景としたリスクオフが継続しようとも、資金流出を理由としてパーツ安がずるずると継続するとは考えがたい。最後に、今月は8日にタイ中銀の金融政策委員会(MPC)が開催される。前回6月20日のMPCでは5:1(1名欠席)の賛成多数で政策金利据え置きが決定された。議事録では「インフレ率と経済成長が強固なものになれば利上げの検討を開始」と記され、多少なりとも金融引き締めが芽がでてきていることが確認できた。欠席した1名的心思は不明だが、8日の票の行方には十分注意する必要がある。利上げ期待が高まる結果となれば一気にパーツ高に触れる可能性がある。

■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地における夏の風物詩』

ああ夏が来たな、と感じるほど、私はまだタイで季節の変化を感じることはできないのですが、唯一季節を感じるのフルーツでしょうか。今の季節はライチ(リンチーと発音)や、日本ではあまり馴染みがないかもしれませんがランプータン等をよく見かけ、タイ人の同僚からも「親戚の農園で採れたもの」としておすそ分けが貰えます。生リンチーは今の季節にしか食べられず貴重。日本でも食べられる冷凍やシロップ漬けとは、ジューシーさがまるで違います。

さて、パイナップルも旬。先日パイナップル農園近隣のゴルフ場に行きました。帰りに車のトランクにゴルフバッグを積もうとすると、トランクが運転手さんの購入したパイナップルで埋め尽くされていました。「ゴルフバッグはどこに積むの?」と聞くと、「すぐく安いんだ! まとめて100パーツだぞ!」という回答になっていない言い訳を繰り返した運転手さん。「そうだね、この辺パイナップル畑だもんね。今度は私の分も買ってきてよ。」と納得し、結局ゴルフバッグの上に大量のパイナップルを載せ、パイナップル優先で帰宅しました。最近、少しだけ心が広くなったな、と思います。

今の時期は水分が多くて美味しいフルーツが多い気がします。日本で買うとびっくりするくらい高いフルーツも、本場タイではお手ごろ価格で楽しむことができます。夏休みの旅行先候補として、フルーツの美味しいタイ、いかがでしょうか。(井上)

■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/2	消費者物価指数(前年比)	6月	1.53%	1.38%	1.49%
7/2	CPIコア(前年比)	6月	0.80%	0.83%	0.80%
7/5	消費者信頼感景気指数	6月	-	67.9	66.9
7/20	輸出(通関ベース/前年比)	6月	9.50%	8.19%	11.59%
7/31	輸出(前年比)	6月	-	10.00%	13.1%
7/31	輸入(前年比)	6月	-	12.90%	12.70%
7/31	貿易収支	6月	-	\$2875M	\$2695M
7/31	経常収支	6月	\$3958M	\$4084M	\$958M

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	3.9500	~	4.1000
	MYR/JPY	27.10	~	28.10
	JPY/MYR	3.5580	~	3.6950

マレーシアみずほ銀行 関上 伸一

■ 先月の為替相場

米中貿易戦争の過熱化から、7月のMYR相場は軟調に推移し、対ドルで年初来安値を更新した。

4.03台で月初オープンしたMYRは6日予定の米中追加関税発動懸念から3日に4.05を抜けて年初来安値を更新。奇しくも同日ナジブ前首相が1MDB問題に掛かる収賄容疑で逮捕(その後保釈)。6日に米中両国が340億ドル相当の輸入に関する追加関税を相互に発動。米経済指標の強さやタカ派気味のFOMC議事要旨も相俟って、MYRは4.04台の推移。

しかし米6月雇用統計ではNFPRの強さと裏腹に失業率や賃金上昇率の弱さが嫌気されると、原油も堅調な中でMYRは10日に4.0070まで買い戻される展開。しかし米国が輸入USD200bIn規模の対中追加関税を課す方針を明らかにするとMYR高も歯止めが掛かり、4.05近辺に反落。11日はシャムシア新マレーシア中銀総裁就任後初となる金融政策決定会合が開催され、大方の予想通り政策金利3.25%の据置きを決定。声明にて6月からのGST0%化に関連し、近い将来のCPIマイナス転の可能性に言及。

13日の米半期金融政策報告書にてFRBメンバーの米経済への楽観的な見方が確認される一方、貿易戦争への言及は殆ど見当らなかったことから、月後半もMYRは上値重い地合。17日のパウエルFRB議長議会証言も米経済に楽観的なトーンでMYRは4.06を突破。18日発表の6月消費者物価指数(CPI)は前年比+0.8%と予想を0.5ポイント下回る結果となり、中銀が言及したインフレマイナス転の可能性を再確認。トランプ大統領の中国・EUに向けた為替操作批判に起因するドル安からMYRも23日に4.05を割込むも一時的で、24日には再度人民元が安値を更新。月末のUSD買いも相俟って、MYRも7/27午前中に4.0720迄年初来安値を更新している。

■ 今月の見通し

8月のMYR相場は3.9500-4.1000レンジでの推移を予想。米中貿易戦争過熱化による人民元安が引続きMYRの弱材料となる一方、新政権のプライマリーバランス改善に関する政策進展に注目が集まる。

米中貿易戦争については明確な打開策が見えないまま7月を終えようとしている。しかもトランプ大統領はEUや中国が為替水準を操作していると批判、且つFRBの利上げスタンスにも反対の意思を示し、貿易戦争が通貨戦争へと発展するリスクも囁かれている。マレーシアの最大貿易相手国である中国人民元の為替変動がMYR相場に波及効果を与える点は議論を待たず、傍、貿易戦争の長期化はリム財務相も懸念を口にしているようにマレーシアの成長に悪影響を与える虞が高いことから、現在の状況は本質的にMYRにネガティブ。しかしながら米中間選挙イヤー、特に共和党政権下では米政府からドル安圧力がもたらされる展開は過去に幾度も経験していることから、人民元安に政治的な歯止めが掛かる展開となればMYRのセンチメントも変化の可能性あり。

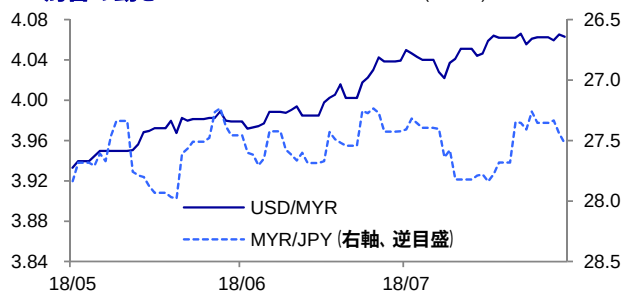
もうひとつの注目点として、8月の中旬にマハティール新政権が設立100日目を迎える。政権交代後の5月下旬に政府債務の状況が次第に明らかとなり、6月初に財務省は小型車燃料補助金等一部の100日公約について実質凍結を発表すると共に、その前提での2018年プライマリーバランス見通しを公表。7月初にナジブ前首相が逮捕される等1MDB問題の究明が加速する中で、足元新政権は東海岸鉄道や新たに明らかになって官民パートナーシップに関する政府債務等、旧政権時代に中国との間で合意がなされていたと見られるプロジェクトの仕切り直しに動いていると見られる。賢人会議議長のダイム元財務相が7月に中国入りし、今月は首相の訪中が予定。6月も当地債券市場からの海外投資家の資金流出は継続しているが、信認回復に繋がる材料が示されるか、留意が必要だ。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地における夏の風物詩』
乾季と雨季しか季節がなく、年中気温は30度越えしている当地マレーシアであります、日本的な夏の風物詩としては、KL日本人会主催の盆踊り大会が有名です。今年は第42回目を数え、7月21日土曜日にセランゴール州の国立競技場で開催されました。そうです。例年3万人を超える参加者が集まることから、会場もその辺の空き地という訳にはいかず、国立競技場になってしまうのです。
本邦外務省の発表によれば、昨年10月1日時点でのマレーシアの在留邦人数は2.4万人。うちペナン領事館及び東マレーシア事務所の管轄分を除くと2万人弱がKL大使館の直轄分となる訳ですが、この在留邦人が全員参加しているわけではありません。感覚的には派遣者家族の半分位が参加しているのではないかという気がします。即ち、参加者の大多数はマレーシア人によって占められているのが実態です。夕刻の16時半に会場がオープンすると、日本の縁日よろしく露店がズラリと並び、日本風のカキ氷の屋台前には早速大行列が出来上がります。マレーシア人もこのイベントは浴衣または甚平でキメて参加する人が多く、加えて女性は髪も和風に結って参加する念の入り様です。
実際に盆踊りがスタートするのは日が暮れ始める19時頃で、競技場トラックの中央に設えてある雑段には和太鼓が十張程威勢よく並んでおり、この楽団が勇壮に口火を切ると、壇上で浴衣姿の女性が踊り始め、そして雑段の周りを一般参加者が囲むように踊り始めます。東京音頭や花笠音頭等が休憩を挟みつつ繰り返され、夜10時頃のお開きまで続きます。赤道近辺に居ながら、日本の夏を思い出させてくれるひと時です。

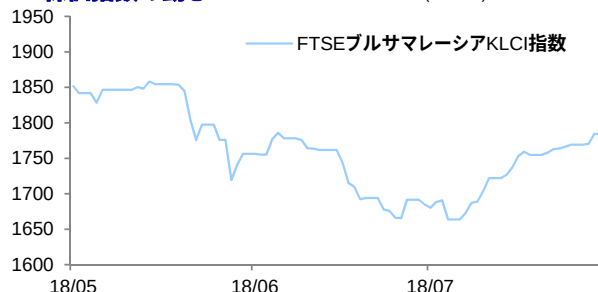
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
5th	Trade Balance	May	10.50B	8.12B	13.07B
5th	Import(y/y)	May	0.2%	0.1%	9.1%
5th	Export(y/y)	May	6.4%	3.4%	14.0%
6th	Foreign Reserves	29Jun		104.7B	107.9B
11th	OPR	-	3.25%	3.25%	3.25%
12th	IP(y/y)	May	3.00%	3.00%	4.60%
18th	CPI(y/y)	June	1.30%	0.80%	1.80%
20th	Foreign Reserves			104.6B	104.7B

(資料) ブルームバーク

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 14000 ~ 14700
IDR/JPY 0.75 ~ 0.80
JPY/IDR 125.00 ~ 133.00

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 河合 良介

■ 先月の為替相場

7月のドルルピアは、14250～14565のレンジでの推移となり、高値圏で推移する中、一時、2015年10月以来となる14565近辺まで上昇した。

月初、14250近辺でスタートしたドルルピアは、2日発表の6月消費者物価指数は市場予想の範囲内で反応は限定的となったが、海外投資家の資金流出から、14400台まで上昇。
また、6日発表された6月外貨準備高も、ルピア相場安定のための為替介入(米ドル売りルピア買い)により5ヶ月連続で減少し、1,198億ドル(前月から▲31億ドル減少)となった。16日発表となった6月貿易収支は、3か月ぶりに黒字転換したものの、レバラン前後の季節的要因との見方が太宗で、相場への影響は限定的、ドルルピアは、14400挟みの高値圏での推移が継続した。

18・19日実施されたインドネシア中央銀行定例会合にて、3か月ぶりの金利据置きが発表されると、一部利上げを期待していたオフショア市場でドルルピアが上昇すると、それにつられる形で、ドルルピアは14475近辺まで上昇。25日には、世界的に債券利回りが上昇し、米10年債利回りが5週間ぶりの水準をつけると、ドルルピアの上昇は加速し、一時14565と2015年10月以来の高値水準をつけた。

その後下落する場面も見られたが、14430近辺での取引きとなっている。(7月27日 東京時間16:00現在)

■ 今月の見通し

今月のドルルピアは、引き続き、実需ベース(経常収支面)でのルピア売りドル買いの圧力により、軟調な展開を予想する。

4月末以降、ドルルピアの急上昇をもたらした海外投資家の資金流出は、インドネシア中央銀行が5・6月と実施した計+1.00%の利上げの効果もあり、一旦は落ち着いている。(海外投資家のインドネシア国債の保有残高は、6月末時点:830兆ルピアに対し、7月25日時点:835兆ルピア)。

それでもなお、ドルルピアが高値圏にて推移する背景には、実需面(経常収支の赤字による)でのルピア売り圧力が強いことが挙げられる。

今月は、例月の経済指標の発表に加え、①6日:第2四半期GDP、②10日:第2四半期経常収支が発表される。

①については、5月に第1四半期分が発表された際、景気の減速懸念から、ルピア売りを助長したことは記憶に新しい。また、②については、第2四半期貿易収支が赤字転落していることから、経常収支赤字幅の拡大が見込まれ、海外投資家の動向には注意が必要だ。

以上勘案すると、引き続き、実需面からの根強いルピア売り圧力に加え、経済指標の悪化を背景とした海外投資家の動向次第では、2015年9月につけた14700近辺までの上昇も視野に入ってきた。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地における夏の風物詩』

ジャカルタ市内にあるブロックMという地区で、毎年行われている「縁日祭」というお祭りがあります。

100以上を超える出店があり、お神輿が、ブロックM地区を1周します。
このお神輿ですが、日本人以外のローカルの方も応募制で参加でき、成人男性、成人女性、子供の3グループでお神輿を担ぎます。

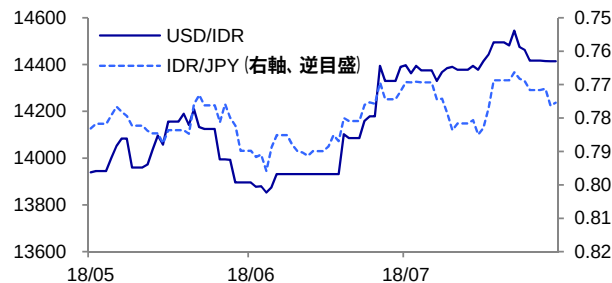
ジャカルタ勤務時は、まだ素直だった子供達がお神輿を楽しそうに担いでいました。

この縁日祭ですが、日本アニメのコスプレをして参加する人が多いのも、特徴です。

縁日祭が開催されるブロックMは、夜の繁華街という一面もあり、家族で参加することをためらうお父様も多いはずです(笑)。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/2	CPI (前年同月比)	6月	3.04%	3.12%	3.23%
7/6	外貨準備高(USD B)	6月	-	119.8	122.9
7/16	輸出 (前年比)	6月	15.64%	11.47%	13.08%
7/16	貿易収支(USD M)	6月	968	1,743	-1,454
7/19	BI 7daysリバースレポ金利		5.25%	5.25%	5.25%

(資料) ブルームバーク

フィリピンペソ相場

予想レンジ:	USD/PHP	52.80	~	54.00
	PHP/JPY	2.07	~	2.15

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 樋上 陽一

■ 先月の為替相場

7月2日の取引開始は1米ドル＝53.40ペソ。月初のドルペソ為替相場(オンショア・インターバンク市場)は注目のイベント(5日の比6月消費者物価、6日の米6月雇用統計の発表)を控え、ペソの売り持ちポジションを整理する動きがみられた。ペソは買い戻され一時、2週間ぶりのペソ高値となる1米ドル＝53.28ペソで取引される場面もあった。

比6月消費者物価は前年比+5.2%と予想外の加速となったが、ドルペソ為替相場の反応は限定的。ペソ金利が上昇するという思惑によるペソ買いより、インフレによる通貨価値下落が材料視されて、ややペソ安に振れた程度。米6月雇用統計は非農業部門雇用者数変化が予想を上回り、前回分も上方修正されたが、平均時給は市場予想ほど上昇せず、失業率が先月の3.8%から4%に悪化。賃金上昇ペースが緩やかであったことからインフレ期待(米金利の先高観)はやや後退した結果に。米雇用統計の結果を受けて、9日の取引開始は1米ドル＝53.35ペソ。

10日に発表された比5月貿易収支は赤字幅が拡大しペソ売り材料に。トランプ政権発の貿易戦争リスクでリスクオフの流れで13日は週の終値ベースでは12年半ぶりのドル高値である1米ドル＝53.51ペソで越週。

16日に発表された比5月OFW(海外在留フィリピン人労働者)送金が前年比+6.9%増の24.7億ドルとなり、前月から増加、市場予想もやや上回りペソ買い戻し圧力が強まり、17日には1米ドル＝53.38ペソで取引される場面もあったが、パウエルFRB議長の議会証言後はドル買いに。

トランプ大統領のFRBに対する不満、「強いドルは米国を不利な立場に置く」との発言はドルペソ為替相場にあまり影響せず。根強いドル買い需要に支えられ20日には、直近の高値53.55ペソをつける(6月27日、7月12日にも記録)。

地合としてはドル買いが進む雰囲気はあったものの、ペソ安を防衛したい当局の動きが意識されて上値重く。

G20では貿易戦争に対する米国の歩み寄りがみられず、主要通貨に対してドルが売られたことから、リスクオフ(安全資産を偏好する動き)のドル買いと相殺される形でペソは底固く推移。

25日にトランプ大統領とユンケル欧州委員長の会談で貿易摩擦への回避が合意されたことで、月末の輸入企業のドル買いフローをこなしながらペソの買い戻しが優勢となり、約一ヶ月ぶりのペソ高値である1米ドル＝53.285ペソで27日は越週。

■ 今月の見通し

比6月消費者物価は左記の通り前年比+5.2%と予想外の加速でフィリピン中銀のインフレ目標の上限値である4%を大幅に超過。8月9日に予定されているフィリピン中銀金融政策委員会では、利上げが市場コンセンサス。0.25～0.5%ポイントの利上げが見込まれており、ペソ安がインフレ加速へ与える影響を懸念する中銀がペソ安対策を講じるとの思惑も台頭しそう。

フィリピン中銀が6日に発表した比6月外貨準備残高は777億ドルとなり、前月から約2%の減少で7年ぶりの低水準に。ペソ安を食い止めるための介入による減少は、国の健全性を測る上での指標悪化に繋がりペソ安材料。とはいえ、IMF(国際通貨基金)によればフィリピンについては、他のアジア諸国対比で健全性のレベルは高い。フィリピン中銀の介入が今後も継続する(できる)と考えればドルの上値は重く推移しそうだ。

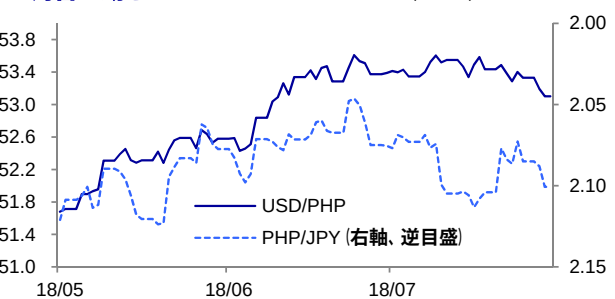
5月のOFW送金は堅調な伸びをみせた。しかしながら月次のOFW送金と貿易赤字のネット金額については、5月は▲12.3億ドルと前月と同水準だったことで実需面ではペソ売りを示唆している。また米10年債金利は再び3%台を窺う展開になっており、米金利の上昇でドルが選好される市場環境は不変。とはいえ、一ヶ月半ほどドルペソ為替相場は中銀の介入警戒感から上値が抑えられ、取引レンジは1米ドル＝53.30～50ペソと膠着感が強まっている。そろそろ相場が動意づくタイミングかもしれない。ドルの上値が重いことからペソの買戻しが思った以上に進むことも想定しておきたいところ。

トランプ大統領の米金利上昇やドル高に対する不満は今後も表明されそう。口先介入でこれまでドルを買い持ちにしていた市場参加者のポジション調整があっても驚きはない。

また、今年に入ってから新興国市場は株安・通貨安に晒されてきたが、安くなったことで投資妙味が増しているとの見方が出始めている。事実、外国人投資家のフィリピン株週次売買動向は、23～27日の週においては6ヵ月ぶりに買い越しに転じている。

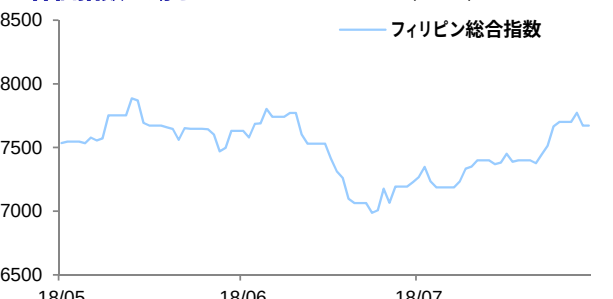
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
	上記参照

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回

インドルピー相場

予想レンジ:

USD/INR	66.90	~	70.50
INR/JPY	1.59	~	1.65

アジア・オセアニア資金部 インド室 田川 順也

■ 先月の為替相場

【7月の米ドル/インドルピーは横這いでの推移だった】

6月28日に史上最高値を更新(69.09)した後、68.49レベルで当月の取引を開始。序盤は原油高に加えて、米国が中国通信企業の参入を阻止したり追加関税を発動したり、と米中間の激化する通商交渉を嫌気した新興国通貨安から68.70近辺で高値圏での取引が続いた。

2週目に入ると、米6月雇用統計にて失業率、平均時給が事前予想を下回る内容にドル売りが先行したことに加え、印6月消費者物価指数が5.0%、また75ドル手前で高止まりしていた原油価格(WTI)が67ドルまで調整すると安心感からルピー買いもあり、17日には当月の安値となる68.27を示現。ただし、その後は原油価格が上記水準でサポートされる展開。また中国が対ドルで1年ぶり水準まで人民元安方向に誘導するとアジア通貨が全般的に売られる中、米国では注目されていたFRB議長の議会証言にて経済に対して楽観的な発言が聞かれたことも相まってドル買い/ルピー売りを誘発。ドル/ルピーは先月更新した史上最高値を再度更新し、20日には69.12まで上伸した。

その後月末にかけては更なる高値追いはならず、活況を呈す印株式市場に海外投資家からの買いフローも聞かれ、それに伴ったルピー買いが意識される中、27日執筆時点で68.68近辺での推移となっている。7月を通しての値幅が85パイサと動きづらいう月だった。

【7月のインドルピー/日本円は上に往って来いの展開だった】

1.62レベルで7月オープンを迎えたルピー/円は米中間交渉を背景としたリスク回避的な展開に当初円買いが進行。ドル/円が110円半ばをつける動きにルピー/円も当月の安値である1.602近辺まで円高進行。

ただ、その後は既述のFRB議長証言や月後半に発表された良好な米経済指標を受けてドル/円は113円を上抜け。同タイミングでルピー/円も当月高値となる1.651をヒート。

終盤にかけてはトランプ大統領から政策金利の利上げをけん制する発言があるとドル/円は反転、111円台を割り込む動きにルピー/円も1.61台まで下落した。27日執筆時点で1.618近辺にて取引されている。ドル/ルピーが動きづらかったゆえにドル/円の動きが与えるルピー/円への影響が大きい月だった。

■ 今月の見通し

【8月の米ドル/インドルピーは上値の重い展開を想定】

トランプ大統領の動向に市況も忙しない状況が続いている。①つめは通商交渉である。現状は輸入総量の規制や追加関税という方法で他国の対米貿易黒字を解消しようとしている(=貿易戦争)。一方で7月の中国の動きは関税報復を米にするというよりは自国通貨安で報復に出ているように見取れる。つまり米国から5%追加関税を受けたとしても5%人民元安に誘導すれば関税分をオフセットすることができる。これをトランプ大統領は強けん制する発言をしており、今後は通貨安戦争の可能性も視野に入る。

②つめはFRBの利上げを「好ましくない」という発言をしたことだ。これは利上げが及ぼすドル高への影響をけん制する意味合いも含まれているが、広い視野では11月中間選挙に向け、株式市場や国内産業を下支えする意図が見える。いずれにしてもトランプ氏が何かしようとするのが替市場へのインプリケーションとしては「ドル安」であることを忘れてはならない。

他方インドであるが、6月製造業PMIは53.1となっており(第1Q平均51.9)国内製造業の動きは引き続き堅調さが確認できる。消費者物価指数は5.0%とこれも堅調なものとなっておりインド準備銀行(中央銀行、RBI)のターゲットを8か月連続で上回っており、利上げ期待が高まっている。良好な第1Q決算を背景にSENSEXは史上最高値を更新。インドの好景気をあらわしている。

また、5月、6月と立て続けにドル/ルピーは史上最高値を更新したが、節目を超えたにも関わらずその後の値動きは走らず、落ち着いているところを見るとRBIによるルピー買い為替介入も見え隠れしている。

原油価格の動向が今後も気になるとはいえ、ドル/ルピーは70レベルで頭打ち、リスクはダウンサイドにあるだろう。

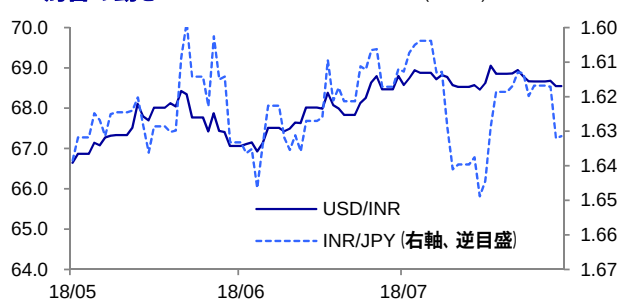
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地における夏の風物詩』

ニューデリーの夏は5月~7月です。(8月はどしゃぶりが続くモンスーン期)。そして酷暑。口も利くのがつらいほど気温は上昇、40℃を超える日々が2か月ほど続き、そんな辛い日々エアコンの次と言っても過言ではないほど日々の生活に潤いをもたらす存在はマンゴー。品種は100種を越え、インドマンゴーの王様と呼ばれる、深い甘味が特徴のアルフォンソ(Alphonso)はどうやら銀座や六本木の果物屋さんではとんでもない価格で売られていると聞いたことがあります。こちらでは安いお店で1ダース500rs(800円)から。しかしながらどんなに美味しくとも、安くとも、マンゴーはウルシ科のため食べ過ぎに注意しないといけません。(ニューデリー 長谷川)

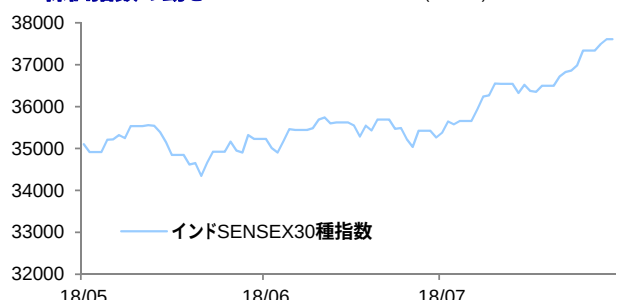
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
7/2	製造業PMI
7/12	CPI
7/12	鉱工業生産
7/13	貿易収支

(資料) ブルームバーク

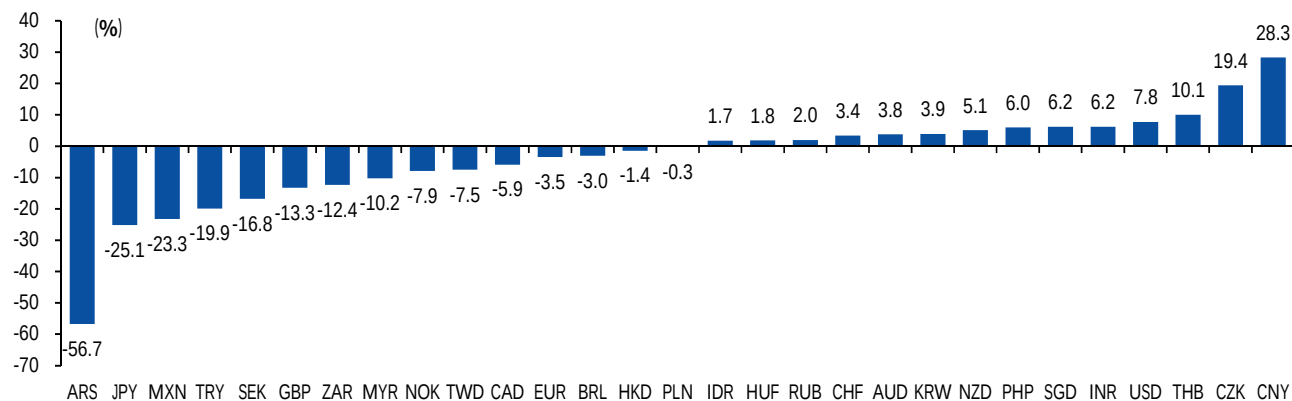
期間	予想	結果	前回
6月	-	53.1	51.2
6月	5.28%	5.00%	4.87%
5月	4.40%	3.20%	4.90%
6月	-144億ドル	-166億ドル	-146億ドル

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2017年末	2018年7月末	騰落率	株式市場	2017年末	2018年7月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	24719.22	25415.19	2.8%	-
日本	USD/JPY	112.69	111.86	-0.7%	日経平均株価	22764.94	22553.72	-0.9%	-0.2%
ユーロ圏	EUR/USD	1.2005	1.1691	-2.6%	ドイツDAX指数	12917.64	12805.5	-0.9%	-0.9%
英国	GBP/USD	1.3513	1.3124	-2.9%	ロンドンFTSE100指数	7687.77	7748.76	0.8%	3.8%
豪州	AUD/USD	0.7809	0.7424	-4.9%	S&P/ASX200指数	6065.129	6280.201	3.5%	8.9%
カナダ	USD/CAD	1.2571	1.3006	3.5%	S&Pトント総合指数	16209.13	16434.01	1.4%	-2.0%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.5068	6.8167	4.8%	上海総合	3307.172	2876.401	-13.0%	-17.0%
香港	USD/HKD	7.814	7.8491	0.4%	香港ハンセン	29919.15	28583.01	-4.5%	-4.9%
インド	USD/INR	63.8725	68.5475	7.3%	インドSENSEX30種	34056.83	37606.58	10.4%	2.9%
インドネシア	USD/IDR	13555	14414	6.3%	ジャカルタ総合	6355.654	5936.443	-6.6%	-12.2%
韓国	USD/KRW	1067.4	1118.73	4.8%	韓国総合株価	2467.49	2295.26	-7.0%	-11.2%
マレーシア	USD/MYR	4.0465	4.0652	0.5%	ブルサマレーシアKLCI	1796.81	1784.25	-0.7%	-1.2%
フィリピン	USD/PHP	49.85	53.101	6.5%	フィリピン総合	8558.42	7672	-10.4%	-15.8%
シンガポール	USD/SGD	1.336	1.3615	1.9%	シンガポールST	3402.92	3319.85	-2.4%	-4.3%
台湾	USD/TWD	29.733	30.625	3.0%	台湾加権	10642.86	11057.51	3.9%	0.9%
タイ	USD/THB	32.574	33.205	1.9%	タイSET	1753.71	1701.79	-3.0%	-4.8%

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート (REER) の1994年以降の平均からの乖離 (2018年6月時点)



■ 実質GDP成長率

	2016Q4	2017Q1	2017Q2	2017Q3	2017Q4	2018Q1	2018Q2	2016	2017
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	1.8	1.8	3.0	2.8	2.3	2.2	4.1	1.6	2.2
日本*	1.0	2.7	2.1	2.0	1.0	-0.6		0.9	1.7
ユーロ圏	2.0	2.0	2.5	2.8	2.8	2.5	2.1	1.8	2.4
英国	1.7	1.8	1.8	1.7	1.3	1.2		1.8	1.7
豪州	2.4	1.8	2.0	2.8	2.4	3.1		2.6	2.3
カナダ*	2.3	3.7	4.3	1.7	1.7	1.4		1.4	3.1
エマージングアジア									
中国	6.8	6.9	6.9	6.8	6.8	6.8	6.7	6.7	6.9
香港	3.4	4.4	3.9	3.6	3.4	4.7		2.2	3.8
インド	6.8	6.1	5.6	6.3	7.0	7.7		7.1	0.0
インドネシア	4.9	5.0	5.0	5.1	5.2	5.1		5.0	5.1
韓国	2.6	2.9	2.8	3.8	2.8	2.8	2.9	2.9	3.1
マレーシア	4.5	5.6	5.8	6.2	5.9	5.4		4.2	5.9
フィリピン	6.7	6.5	6.6	7.2	6.5	6.8		6.9	6.7
シンガポール	3.7	2.5	2.8	5.5	3.6	4.3	3.8	2.0	3.6
台湾	2.8	2.6	2.3	3.2	3.4	3.0	3.3	1.4	2.9
タイ	3.0	3.4	3.9	4.3	4.0	4.8		3.3	3.9

(注) インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	17/12	18/01	18/02	18/03	18/04	18/05	18/06	2016	2017
	(%)							(%)	
先進国									
米国	4.1	4.1	4.1	4.1	3.9	3.8	4.0	4.9	4.4
日本	2.7	2.4	2.5	2.5	2.5	2.2	2.4	3.1	2.8
ユーロ圏	8.7	8.7	8.6	8.5	8.4	8.3	8.3	10.0	9.1
英国	4.4	4.3	4.2	4.2	4.2	4.2	0.0	4.9	4.5
豪州	5.5	5.5	5.5	5.5	5.6	5.4	5.4	5.7	5.6
カナダ	5.8	5.9	5.8	5.8	5.8	5.8	6.0	7.0	6.3
エマージングアジア									
中国	3.9			3.9				4.0	3.9
香港	2.9	2.9	2.9	2.9	2.8	2.8	2.8	3.4	3.1
インドネシア			5.1					5.6	5.4
韓国	3.7	3.6	3.6	4.0	3.8	4.0	3.7	3.7	3.7
マレーシア	3.3	3.4	3.3	3.3	3.3	3.3	0.0	3.5	3.4
フィリピン		5.3			5.5			5.5	5.7
シンガポール	2.1			2.0				2.1	2.2
台湾	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.9	3.8
タイ	1.0	1.3	1.3	1.2	1.1	1.0	1.1	1.0	1.2

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	17/12	18/01	18/02	18/03	18/04	18/05	18/06	18/07	2016	2017
	(前年比%)								(前年比%)	
先進国										
米国	2.1	2.1	2.2	2.4	2.5	2.8	2.9		1.3	2.1
日本	1.0	1.4	1.5	1.1	0.6	0.7	0.7		-0.1	0.5
ユーロ圏	1.4	1.3	1.1	1.3	1.3	1.9	2.0	2.1	0.2	1.5
英国	3.0	3.0	2.7	2.5	2.4	2.4	2.4		0.7	2.7
豪州	1.9			1.9			2.1		1.3	1.9
カナダ	1.9	1.7	2.2	2.3	2.2	2.2	2.5		1.4	1.6
エマージングアジア										
中国	1.8	1.5	2.9	2.1	1.8	1.8	1.9		2.0	1.6
香港	1.7	1.7	3.1	2.6	1.9	2.1	2.4		2.4	1.5
インド	5.2	5.1	4.4	4.3	4.6	4.9	5.0		5.0	3.3
インドネシア	3.6	3.3	3.2	3.4	3.4	3.2	3.1		3.5	3.8
韓国	1.5	1.0	1.4	1.3	1.6	1.5	1.5	1.5	1.0	1.9
マレーシア	3.5	2.7	1.4	1.3	1.4	1.8	0.8		2.1	3.9
フィリピン	2.9	3.4	3.8	4.3	4.5	4.6	5.2		1.8	3.2
シンガポール	0.4	0.0	0.5	0.2	0.1	0.4	0.6		-0.5	0.6
台湾	1.2	0.9	2.2	1.6	2.0	1.6	1.3		1.4	0.6
タイ	0.8	0.7	0.4	0.8	1.1	1.5	1.4		0.2	0.7

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2016Q3	2016Q4	2017Q1	2017Q2	2017Q3	2017Q4	2018Q1	2016	2017
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.4	-2.4	-2.3	-2.4	-2.3	-2.4	-2.3	-2.4	-2.3
日本	3.6	3.8	3.8	3.8	4.0	4.0	4.0	3.8	4.0
ユーロ圏	3.4	3.3	3.3	3.0	3.2	3.5	3.6	3.3	3.5
英国	-6.4	-5.8	-5.3	-5.2	-4.6	-4.1	-3.9	-5.8	-3.9
豪州	-2.9	-1.1	-1.3	-2.2	-2.0	-3.1	-2.3	-2.9	-2.5
カナダ	-3.6	-3.2	-2.9	-2.8	-2.8	-3.0	-3.2	-3.2	-3.0
エマージングアジア									
中国	2.4	1.8	1.5	1.3	1.0	1.3	0.9	1.8	1.3
香港	4.1	3.8	3.4	3.7	4.4	4.2	4.1	3.8	4.3
インド	-0.5	-0.6	-0.7	-1.3	-1.4	-1.5	-1.9	-0.6	-1.5
インドネシア	-2.2	-1.8	-1.5	-1.4	-1.3	-1.7	-2.0	-1.8	-1.7
韓国	7.4	7.0	6.3	5.5	5.6	5.1	4.5	7.0	5.1
マレーシア	1.9	2.1	2.0	2.6	3.0	3.0	3.7	2.1	3.1
フィリピン	1.0	0.2	-0.2	-0.3	-0.3	-0.8	-0.6	0.2	-0.8
シンガポール	19.5	19.0	19.9	19.3	18.8	19.3	18.5	19.0	18.8
台湾	13.6	13.4	12.8	12.6	13.2	15.4	14.5	13.4	14.3
タイ	12.1	11.7	11.1	10.6	10.8	10.8	10.3	11.7	

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	(単位: bp)	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	1.75- 2.00	引き締め: 2015/12/17	0.25 - 0.50	2018/6/13	+25	2018/6/13	+25bp
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10	2018/7/31	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5	2018/7/26	現状維持
英国	バンク・レート	0.50	引き締め: 2017/11/2	0.25	2017/11/2	+25	2018/6/21	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	1.50	緩和: 2011/11/1	4.75	2015/8/2	-25	2018/7/3	現状維持
カナダ	翌日物金利	1.25	引き締め: 2017/7/12	0.50	2018/1/17	+25	2018/7/11	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利	4.35	緩和: 2012/6/8	6.31	2015/8/25	-25	2015/10/23	-25bp
香港	基準貸出金利	0.50	緩和: 2007/9/19	6.75	2008/12/17	-100	2011/12/14	現状維持
インド	翌日物レポ金利	6.25	引き締め: 2018/6/6	6.00	2018/6/6	+25	2018/6/6	+25bp
インドネシア	7日物リバースレポレート	5.25	引き締め: 2018/5/17	4.25	2018/6/29	+50	2018/7/19	現状維持
韓国	7日物レポ金利	1.50	引き締め: 2017/11/30	1.25	2017/11/30	+25	2018/7/12	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.25	引き締め: 2018/1/23	3.00	2018/1/23	+25	2018/7/11	現状維持
フィリピン	翌日物金利	3.50	引き締め: 2018/5/10	3.00	2018/6/20	+25	2018/6/20	+25bp
タイ	翌日物レポ金利	1.50	緩和: 2011/11/30	3.50	2015/3/11	-25	2018/6/20	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	6.25	緩和: 2012/3/12	15.00	2017/7/7	-25	2017/7/7	-25bp

(注) インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をB/Lレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行